

福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年報

令和6年度（2024）

F.U.

Sports and Health Science

福岡大学スポーツ科学部

第10号

福 岡 大 学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年 報

令和六年度（2024）

福岡大学スポーツ科学部

第 10 号

目 次

	挨拶	1
	活動内容	
1	学部および研究科の三つのポリシー	3
	(1) スポーツ科学部	
	(2) スポーツ健康科学研究科	
2	教員組織および担当者	10
3	入試状況、学生数および卒業生数、出張講義	
	(1) スポーツ科学部	14
	(2) スポーツ健康科学研究科	18
4	教育活動	
	(1) 入学前教育	19
	(2) 新入生懇談会	19
	(3) クラス面談・修学指導	20
	(4) フレッシュマンセミナー授業方法	23
	(5) ステップアップセミナー授業方法	27
	(6) 授業形式と授業用ツール活用について	29
5	研究活動	32
	(1) スポーツ科学部	
	(2) スポーツ健康科学研究科	
6	FD・SD 活動	33
	(1) シラバス点検	
	(2) 学外研修参加	
	(3) ワークショップ、研修会の開催	
	(4) 授業アンケート	
7	地域連携・社会貢献・高大連携	39
8	国際交流	44
9	教職課程	46
10	就職・進路	
	(1) スポーツ科学部	48
	(2) スポーツ健康科学研究科	49
11	広報推進	50
12	外部獲得資金実績	52
13	リスクマネジメント委員会	54
14	関連資料一覧	56

学部・研究科のさらなる前進へ

スポーツ科学部長 檜垣 靖樹

スポーツ健康科学研究科長 上原 吉就

スポーツ科学部とスポーツ健康科学研究科では、2015 年度版から学部と研究科の年間活動を総括し、記録に残すとともに学内外にその成果を公表する目的で、2016 年秋に「スポーツ科学部・スポーツ健康科学研究科年報」を創刊しました。本年報は、2024 年度版（第 10 号）になります。

学部・研究科教員の研究活動（研究業績）と社会活動、競技・指導活動は「スポーツ科学研究（大学研究紀要）」に、また学部教育充実の一環として取り組んでいる「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」と「ココロとカラダのウェルネスプログラム」はホームページ上で公開しています。

スポーツ科学部は、1969 年（昭和 44 年）体育学部体育学科として学生定員 100 名で創設されました。その後、学生定員増（臨時定員増を含め）を何度か経て現在の学生定員 295 名となっています。1998 年（平成 10 年）スポーツ科学部への名称変更とともにスポーツ科学科と健康運動科学科の 2 学科へ改組転換し現在に至っています。2019 年（平成 31 年＝令和元年）には、学部創設 50 周年を迎え、盛大に記念式典が行われました。2024 年（令和 6 年）前期卒業生 5 名、2025 年（令和 7 年）3 月、278 名の卒業生を加えて総数 13,048 名を輩出しています。

スポーツ健康科学研究科は、1990 年（平成 2 年）体育学研究科体育学専攻修士課程として 6 専修部門（体育学、体力学、スポーツ医学、体育科教育学、コーチ学、健康運動学）を創設しました。2003 年にスポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻に改称し、2022 年度からスポーツマネジメント学、スポーツ整形外科学が増設、また 2023 年度からはスポーツ行動科学が増設され、現在 6 部門 15 専修となっています。博士課程後期では 2004 年にスポーツ健康科学専攻博士課程を 2 部門（健康運動科学、スポーツトレーニング科学）増設しており、より多様で多くの大学院生を受け入れる体制を構築しています。

2023 年 3 月では、9 名の修了生を加えて総数 475 名の修了生（修士課程 429 名、満期退学者を含む博士課程 46 名）を輩出しています。

2013 年（平成 25 年）12 月から学部役職員の変更に伴う新体制がスタートし、田中守元学部長のもと“学部の魅力づくり”をテーマに、“FUSS Active Plan（福岡大学スポーツ科学部推進計画）”の名称で取り組んできました。最初の 5 年間をブロンズ・シルバーステージと称し、続く 5 年間をゴールドステージと位置づけ、米沢利広前学部長に継承されてきました。10 年の区切りとして「スポーツ科学部推進計画（FUSS Active Plan）10 年間の成果」

をまとめ、2024 年 9 月には、FUSS Active Plan NEXT5 を策定しました。5 つの Vision と 5 つの Action を掲げ、学部 of 更なる発展を目指し、学部・研究科が一体となって取り組んでいるところです。そして、2024 年 12 月よりスポーツ科学科および健康運動科学科に学科主任制度を取り入れ、下園博信スポーツ科学科主任、森口哲史健康運動科学科主任を中心に両学科の特徴をさらに引き出す取り組みも始めました。スポーツ科学および健康運動科学の学びを深めるなかで、形式知と実践知を融合する総合知を醸成し、地域社会に貢献する高い志を持った多様な学生を育成するために、令和 8 年に向けてのカリキュラム改革も進行中です。

大学院 スポーツ健康科学研究科においては、2020、2021 年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、2022 年度も 9 回目を迎える予定であった釜山大学との大学院国際学術交流は中止となりました。一方、2022 年度から 2 専修科目、2023 年度からも 1 専修科目をさらに増設することで、大学院の活性化を図っています。また、2020 年度から新たに立ち上げたスポーツ健康科学研究科ホームページに 2021 年度からは、よりビジュアルに訴えかけた紹介動画を新たに作成し、大学院における活動状況を学内外に積極的に発信しています。また、2022 年度は飛び級対象者の出願に合わせるように大学院説明会を行い、大学院早期履修対象者への個別の案内も行っています。その効果もあってか、僅かではあるが飛び級・早期履修の問い合わせや申請が増えている印象を受けています。

2021 年度にはマラ工科大学との部局間協定のセレモニーを行い、正式に部局間協定を締結した。したがって、2022 年 4 月 1 日から福岡大学とマラ工科大学との部局間協定が開始となり、学生および教員レベルで積極的に相互交流を進めていきたい。

令和 6 年度の採用人事に関して、講師以上の採用はありませんが、新助教 9 名、新助手 6 名を含めて、専任教員（講師以上）31 名、特任教授 1 名、助教・助手 27 名、教育技術職員 4 名で学生教育に取り組んできました。令和 7 年 3 月をもって、これまでスポーツ科学部および大学院スポーツ健康科学研究科の教育、研究、社会貢献、そして学友会活動にご尽力された青柳領教授が定年退職されました。39 年間の多大なるご功績に感謝申し上げる次第です。青柳先生は日頃より生涯研究者として研究論文を執筆し続けてこられました。その探求心と好奇心の火を絶やすことなく、常に新たな知見を追及される素晴らしい研究者でした。今後の研究のさらなる発展と、先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

1 学部および研究科の人材養成の目的と三つのポリシー

(1) スポーツ科学部

●人材養成の目的

スポーツ科学部は、スポーツ・運動に関する人文科学、社会科学、自然科学及び各分野を融合した総合科学的研究を深め、それによって得られた知識を実践に生かすことを教育研究の理念とする。この理念に基づき、スポーツ界、教育界、産業界、官界、地域社会、医療分野等において、貢献し得る優秀な人材を養成することを目的とする。

○アドミッション・ポリシー

スポーツ科学部は人材養成の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツや身体運動を対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般にかかわる職種を目指そうとする人

の入学を求めています。

○カリキュラム・ポリシー

スポーツ科学部のカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1 年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1 年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む推奨コースを設定しています。さらに、実技科目や演習科目は、理論と実践を統合した教育を体系的に行うために、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。

スポーツ科学科は、自らが専門とするスポーツ種目の技能およびスポーツ全般にわたる科学的指導能力の向上を、また健康運動科学科は、健康運動・レクリエーションの科学的基礎知識に基づく実践・指導能力の習得をそれぞれねらいとし、各学科の特性にあったカリキュラムを編成しています。

○ディプロマ・ポリシー

スポーツ科学部の教育課程においては、以下に掲げる能力を備え、厳格な成績評価のもとで所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. スポーツや運動全般の科学的指導能力を備えている。
2. 専門とするスポーツ・運動の高い技能と指導能力を備えている。
3. スポーツ・運動の医科学的知識に基づく卒業論文作成能力を備えている。
4. スポーツ・運動を通じて得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、課題解決力、倫理的思考力を備えている。

■ スポーツ科学科 学位（教育）プログラム名：スポーツ科学

●人材養成の目的

スポーツ科学科は、スポーツ競技力や運動能力の向上を目指したスポーツ医科学分野の知識を有し、スポーツ界、教育界、産業界、官界等において、スポーツ医科学の知識に基づいた適切なスポーツの実践と論理的指導ができる人材を中心に、科学的トレーニング法のみならず、施設や用具等の開発、スポーツイベント等の企画・運営を含めたスポーツマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

スポーツ科学科 三つのポリシー

○アドミッション・ポリシー

✦養成する人材像・教育課程の特色

スポーツ科学科は、競技力や運動能力の向上を目指したスポーツ医科学分野の知識を有し、適切なスポーツの実践と論理的指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、スポーツ・運動に関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び卒業後の進路に対応した 4 つのコースを用意しています。自身の競技力向上とアスリートやコーチを目指すためのアスリート・コーチコース、アスリートのサポートを担うためのトレーナーコース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応したスポーツ科学の在り方を探求しています。

✦求める人材像（求める能力）

- ・ **知識・理解** 競技スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人
- ・ **技能** 競技スポーツの経験を有し、競技力向上のために科学的に課題を分析できる人
- ・ **態度・志向性** スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人
- ・ **その他能力・資質** 学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

✦入学者選抜のねらい

スポーツ科学科では、競技スポーツの実践経験と高等学校までの学びを融合させ、競技力向上を目的とするスポーツ科学の発展に寄与しようとする人材を広く受け入れます。

そのため、これまでに培われた学力、活動や経験を通じて身につけた能力、資質、学ぶ意欲などを、多面的・総合的に評価する多様な入学試験を実施します。

○カリキュラム・ポリシー

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1 年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって、学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1 年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む 4 つの推奨コース（アスリート・コーチコース、トレーナーコース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群およびコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

スポーツ・運動の理論と実践を統合した教育を体系的に行うため、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。実技科目については、自らが専門とするスポーツ種目を学べるように、選択必修の実技科目を多く配置しています。そして、「スポーツ実習Ⅱ」や「コーチ法演習」などの科目では、専門とするスポーツ種目のコーチング理論を深めるとともに、リーダーシップ・コミュニケーション能力および倫理的思考力の育成も行っています。

○ディプロマ・ポリシー

【知識・理解】

- A-1 スポーツ・運動の医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 専門とするスポーツの技術構造について理解し、説明できる。
- A-3 専門とするスポーツの指導方法について理解し、説明できる。

【技能】

- B-1 専門とするスポーツの技術を習得し、競技等の場面において発揮することができる。
- B-2 専門とするスポーツの技術構造や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 スポーツ・運動を通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 スポーツ・運動を通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 スポーツ科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 スポーツ・運動について自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 スポーツ・運動を論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 スポーツ・運動を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 スポーツ・運動についてマネジメント等に取り組む意欲を持っている

■ 健康運動科学科 学位（教育）プログラム名：健康運動科学

●人材養成の目的

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動による心身の健康の回復、保持、増進を目指した医科学分野の知識を有し、地域社会、教育界、産業界、医療分野等において、創造的・実践的な指導を行うことができる人材を中心に、企業や地域及び医療とも連携した健康づくりマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

健康運動科学科三つのポリシー

○アドミッション・ポリシー

✦養成する人材像・教育課程の特色

健康運動科学科は、心身の健康の回復や保持増進を目指した医科学分野の知識を有し、創造的・実践的な指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、健康運動・レクリエーションに関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び卒業後の進路に対応した 3 つのコースを用意しています。健康運動関連資格取得を目指す健康運動指導者コース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応した健康運動科学の在り方を探求しています。

✦求める人材像（求める能力）

- ・ **知識・理解** 生涯スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人
- ・ **技能** 生涯スポーツの経験を有し、健康の回復や保持増進について科学的に分析できる人
- ・ **態度・志向性** スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人
- ・ **その他能力・資質** 学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

✦入学者選抜のねらい

健康運動科学科では、生涯スポーツの実践経験と高等学校までの学びを融合させ、健康の回復や保持増進を目的とするスポーツ科学の発展に寄与しようとする人材を広く受け入れます。

そのため、これまでに培われた学力、活動や経験を通じて身につけた能力、資質、学ぶ意欲などを、多面的・総合的に評価する多様な入学試験を実施します。

○カリキュラム・ポリシー

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1 年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1 年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む 3 つの推奨コース（健康運動指導者コース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群とコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

健康運動・レクリエーションの理論と実践を統合した教育を行うために、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。また、健康運動・レクリエーションに関わる実習科目や演習科目では、現場の実践に即した科学的指導能力やマネジメント能力を高め、地域社会に貢献する態度を身につけられるようにしています。

○ディプロマ・ポリシー

【知識・理解】

- A-1 健康運動・レクリエーションの医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 健康運動・レクリエーションの技術について理解し、説明できる。
- A-3 健康運動・レクリエーションの指導方法について理解し、説明できる。

【技能】

- B-1 健康運動・レクリエーションの技術を習得し、運動指導等の場面において発揮することができる。
- B-2 健康運動・レクリエーションの技術や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 健康運動・レクリエーションを通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 健康運動・レクリエーションを通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 健康運動科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 健康運動・レクリエーションについて、自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 健康運動・レクリエーションを論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 健康運動・レクリエーションの技術を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 健康運動・レクリエーションについてマネジメント等に取り組む意欲を持っている。

(2) スポーツ健康科学研究科

●人材養成の目的および教育研究上の目的

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、運動、スポーツ、レクリエーション、レジャー、体育、健康、福祉等を対象とする学問の深化を図り、健康長寿社会の実現に向けて貢献し、高度なスポーツ知を拓く研究科として機能することを教育理念とする。博士課程前期では、競技スポーツ・学校体育・地域スポーツ・医療等の指導現場において高度な知識と技術を基に、体育・スポーツ・健康・レクリエーションに関する科学的指導を実践・応用できる専門家の養成を行う。博士課程後期では、健康増進や疾病・傷害の治療・予防・再発防止を目的とした運動プログラムの開発・実践に関する研究や、幼少期から高齢期に至るライフステージに応じたスポーツパフォーマンスの向上を目的とした研究などの専門的な領域について自立して研究活動を行い得る研究者を養成する。

博士課程前期

三つの方針（三つのポリシー）		
学位授与方針 （ディプロマ・ポリシー）	教育課程の編成・実施方針 （カリキュラム・ポリシー）	学生の受け入れ方針 （アドミッション・ポリシー）
＜博士課程前期＞		
スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、人材養成の目的および教育研究上の目的のもと、次に掲げる資質・能力を有していると認められる者に、修士（スポーツ健康科学）の学位を授与する。		
スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を達成するため、次に掲げる方針に基づき、教育課程を編成・実施する。		
スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を踏まえ、次に掲げる意欲と能力等を備えた学生・社会人・留学生を受け入れる。		
知識・理解	【学修成果の目標】 1) 自らの研究課題に関連する周辺領域の先行研究内容を多角的に理解し、説明することができる (DP1) 2) 自らの研究課題に関連する先行研究内容を理解し、説明することができる (DP2) 3) 自らの研究課題の目的、方法、結果、およびその意義を説明することができる (DP3) 4) スポーツ健康科学分野の指導現場において必要とされる科学的根拠について説明することができる (DP4)	【教育課程の編成】 1) 各自の専門性を高める 2) リサーチワークとコースワークを組み合わせる 3) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す。
	【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】 1) 各自の専門性を高めるために、リサーチワークである「特別研究」とコースワークである「特講」などの専修科目を設置する 2) 周辺領域の幅広い知識の獲得を意図した非専修科目を設置する 3) 論文指導教員全員によるオムニバス形式の共通必修科目「体育学研究概論」を設置する 4) スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目を設置する	【求める学生像】 博士課程前期では、指導現場において科学的指導を実践・応用できる人材を育成するという観点から、 1) スポーツや運動を科学的観点から研究することに興味のある人 2) 競技スポーツのパフォーマンスを向上させるための科学的方法に興味のある人 3) 教育現場で、より高度な科学的成果を取り入れようとしている人 4) 医療現場で、運動による健康の維持や疾病の予防を図ろうとしている人 の入学を求めている。
技能	【学修成果の目標】 1) スポーツ健康科学分野の研究内容を論理的に論文としてまとめ、また、発表する能力を有している (DP5) 2) スポーツ健康科学分野の指導現場において、科学的根拠に基づく先進的指導を実践・応用する能力を有している (DP6)	【教育課程の編成】 1) 各自の専門性を高める 2) リサーチワークとコースワークを組み合わせる 3) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す。
	【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】 1) 各自の専門性を高めるために、リサーチワークである「特別研究」とコースワークである「特講」などの専修科目を設置する 2) 周辺領域の幅広い知識の獲得を意図した非専修科目を設置する 3) 論文指導教員全員によるオムニバス形式の共通必修科目「体育学研究概論」を設置する 4) スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目を設置する	【学修成果の評価方法】 1) 専修科目14単位、非専修科目14単位、共通必修科目2単位の成績で評価する (DP1, 2, 3, 4) 2) ルーブリック個別評価表において評価する (DP1, 2, 3, 4) 3) 修士論文中間報告会において評価する (DP1, 2, 3, 4) 4) 修士論文において評価する (DP1, 2, 3, 4) 5) 修士論文発表会において評価する (DP1, 2, 3, 4) 6) 修士論文発表資料において評価する (DP1, 2, 3, 4)
態度・志向性	【学修成果の目標】 1) 自らの研究分野における研究倫理基準を遵守する姿勢を有している (DP7) 2) スポーツ健康科学分野の指導現場において、科学的根拠に基づく先進的指導を実践・応用する姿勢や意欲を有している (DP8) 3) 自らの研究や指導成果を国内外に広く発信する姿勢や意欲を有している (DP9)	【教育課程の編成】 1) 各自の専門性を高める 2) リサーチワークとコースワークを組み合わせる 3) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す。
	【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】 1) 各自の専門性を高めるために、リサーチワークである「特別研究」とコースワークである「特講」などの専修科目を設置する 2) 周辺領域の幅広い知識の獲得を意図した非専修科目を設置する 3) 論文指導教員全員によるオムニバス形式の共通必修科目「体育学研究概論」を設置する 4) スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目を設置する	【学修成果の評価方法】 1) 専修科目14単位、非専修科目14単位、共通必修科目2単位の成績で評価する (DP7, 8, 9) 2) ルーブリック個別評価表において評価する (DP7, 8, 9) 3) 修士論文中間報告会において評価する (DP7, 8) 4) 修士論文において評価する (DP7, 8) 5) 修士論文発表会において評価する (DP7, 8) 6) 修士論文発表資料において評価する (DP9)

博士課程後期

＜博士課程後期＞

<p>スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、人材養成の目的および教育研究上の目的のもと、次に掲げる資質・能力を有していると認められる者に、博士（スポーツ健康科学）の学位を授与する。</p>	<p>スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を達成するため、次に掲げる方針に基づき、教育課程を編成・実施する。</p>	<p>スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を踏まえ、次に掲げる意欲と能力等を備えた学生・社会人・留学生を受け入れる。</p>
<p>知識・理解</p> <p>【学修成果の目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 斬新かつ独創的な研究課題を設定することができる (DP1) 2) 自らの研究課題に関連する周辺領域の先行研究内容を多角的に理解し、説明することができる (DP2) 3) 自らの研究課題に関連する先行研究内容を理解し、説明することができる (DP3) 4) 自らの研究課題の目的、方法、結果、およびその意義を説明することができる (DP4) 5) スポーツ健康科学の発展に貢献する有望かつ新しい知見を見出すことができる (DP5) <p>【到達指標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学研究法の単位を取得している (DP1, 2, 3) 2) 研究計画書を提出し、その審査に合格している (DP1, 2, 3) 3) 博士論文を提出し、その審査に合格している (DP1, 2, 3, 4, 5) 4) 論文発表会、自らの研究課題に関連する先行研究の内容を論理的に説明できるとともに、スポーツ健康科学分野における自らの研究課題の位置づけについて説明できる (DP1, 2, 3, 4, 5) 5) 2編以上の原著論文を発表している (DP1, 3, 4, 5) 6) 1編以上の英語原著論文を発表している (DP1, 3, 4, 5) 7) 国内外の学会・研究会で発表している (DP1, 3, 4, 5) 	<p>【教育課程の編成】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高める 2) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指す <p>【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高めるために、「特別研究」を設置する。 2) 関連領域の知識獲得を意図して、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目を設置する 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指して、「スポーツ健康科学研究法」を設置する <p>【学修成果の評価方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学研究法の成績で評価する (DP1, 2, 3) 2) 研究計画書において評価する (DP1, 2, 3) 3) 研究計画書の審査会において評価する (DP1, 2, 3) 4) 博士論文において評価する (DP1, 2, 3, 4, 5) 5) 博士論文の審査会において評価する (DP1, 2, 3, 4, 5) 6) 論文発表会において評価する (DP1, 2, 3, 4, 5) 	<p>【求める学生像】</p> <p>博士課程後期では、高等教育機関あるいは研究機関において独立して研究できる人材を育成するという観点から、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 基礎的な学力ならびに創造的で柔軟な発想を持ち、研究を粘り強く遂行できる人 2) 博士課程前期における研究成果に満足せず、研究を継続することを望む人 3) 医療や健康増進に強い熱意がある人 4) 自分の研究成果を広く国内外に発信したい人 5) スポーツ・体育分野の出身者以外にもスポーツや健康を科学的に研究することに関心のある人の入学を求めている。 <p>そのため、体育・スポーツ関連学部の卒業生のみならず、広範囲からの領域の学生受け入れを目指している。特に、社会人や外国人は積極的に受け入れる。</p>
<p>技能</p> <p>【学修成果の目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学分野の研究内容を論理的に論文としてまとめ、また、発表する能力を有している (DP6) 2) スポーツ健康科学分野の高等教育機関あるいは研究機関において、自立して研究活動を行う能力を有している (DP7) <p>【到達指標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学研究法の単位を取得している (DP6, 7) 2) 研究計画書を提出し、その審査に合格している (DP6, 7) 3) 博士論文を提出し、その審査に合格している (DP6, 7) 4) 論文発表会で発表している (DP6, 7) 5) 2編以上の原著論文を発表している (DP6, 7) 6) 1編以上の英語原著論文を発表している (DP6, 7) 7) 国内外の学会・研究会で発表している (DP6, 7) 	<p>【教育課程の編成】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高める 2) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指す <p>【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高めるために、「特別研究」を設置する。 2) 関連領域の知識獲得を意図して、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目を設置する 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指して、「スポーツ健康科学研究法」を設置する <p>【学修成果の評価方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学研究法の成績で評価する (DP6, 7) 2) 研究計画書において評価する (DP6, 7) 3) 研究計画書の審査会において評価する (DP6, 7) 4) 博士論文において評価する (DP6, 7) 5) 博士論文の審査会において評価する (DP6, 7) 6) 論文発表会において評価する (DP6, 7) 	<p>【入学選抜の在り方】</p> <p>学生の受け入れにあたっては、一般入学生試験に加え、社会人入学生試験、外国人留学生試験を実施し、大学院における学業・研究の遂行に必要な専門的知識、論理的で柔軟な思考力、ならびに学業・研究に対する強い意欲を有しているかを重視して選抜を行う。特に、研究計画の新規性・実現性を評価し、将来的に研究者として自立して研究活動を行うための資質を有しているかを重視して選抜を行う。</p>
<p>態度・志向性</p> <p>【学修成果の目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 自らの研究分野における研究倫理基準を遵守する姿勢を有している (DP8) 2) 自らの研究成果を国内外に広く発信する姿勢と意欲を有している (DP9) 3) スポーツ健康科学分野の研究として、自立して研究活動を行う姿勢と意欲を有している (DP10) 4) 自らの研究成果を、スポーツ健康科学分野における先進的指導実践のために応用する姿勢や意欲を有している (DP11) <p>【到達指標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 大学院学生倫理セミナーに参加している (DP8) 2) スポーツ健康科学研究法の単位を取得している (DP8, 10, 11) 3) 研究計画書を提出し、その審査に合格している (DP8, 10, 11) 4) 博士論文を提出し、その審査に合格している (DP8, 9, 10, 11) 5) 論文発表会で発表している (DP8, 9, 10, 11) 6) 2編以上の原著論文を発表している (DP8, 9, 10) 7) 1編以上の英語原著論文を発表している (DP8, 9, 10) 8) 国内外の学会・研究会で発表している (DP8, 9, 10) 9) 博士論文と論文発表会において、自らの研究課題を指導実践にどのように実践・応用できるか説明できる (DP11) 	<p>【教育課程の編成】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高める 2) 専門の枠を超えて幅広い知識の獲得を目指す 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指す <p>【教育課程の実施（教育方法・授業形態等）】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の専門性を高めるために、「特別研究」を設置する。 2) 関連領域の知識獲得を意図して、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目を設置する 3) 基本的なリサーチ・メソッドの獲得を目指して、「スポーツ健康科学研究法」を設置する <p>【学修成果の評価方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ健康科学研究法の成績で評価する (DP8, 10, 11) 2) 研究計画書において評価する (DP8, 10, 11) 3) 研究計画書の審査会において評価する (DP8, 10, 11) 4) 博士論文において評価する (DP8, 9, 10, 11) 5) 博士論文の審査会において評価する (DP8, 9, 10, 11) 6) 論文発表会において評価する (DP8, 9, 10, 11) 	

2 教員組織 (2024 年度)

スポーツ科学部長 檜 垣 靖 樹		
教 授	青 柳 領	(幼児発育発達・スポーツ計量論)
	乾 真 寛	(コーチ学・サッカー)
	上 原 吉 就	(スポーツ内科学・スポーツ医学・予防医学)
	柿 本 真 弓	(コーチ学・ダンス・体操・新体操競技)
	柿 山 哲 治	(スポーツ教育学・保健体育科教育学)
	片 峯 隆	(コーチ学・運動学・バイオメカニクス・陸上競技)
	川 中 健太郎	(スポーツ栄養学・生化学・分子運動栄養学)
	小牟礼 育 夫	(スポーツ方法学・バスケットボール)
	重 森 裕	(脳神経外科学・救急医学)
	下 園 博 信	(スポーツ心理学・スポーツ方法学・ラグビー)
	田 口 晴 康	(スポーツ運動学・体操競技・器械運動)
	田 中 守	(体力学・トレーニング学・生理学・ハンドボール)
	田 場 昭一郎	(コーチ学・競泳)
	築 山 泰 典	(野外教育学・レクリエーション)
	布 目 寛 幸	(バイオメカニクス)
	野 口 安 忠	(コーチ学・スポーツ方法学・陸上競技)
	檜 垣 靖 樹	(スポーツ生理学・健康運動学・予防医学)
	藤 井 雅 人	(スポーツ社会学・スポーツ教育学)
	道 下 竜 馬	(スポーツ生理学・健康運動学)
	村 上 純	(スポーツ方法学・コーチ学・ラグビー)
	森 口 哲 史	(公衆衛生学・鍼灸医学・ハンドボール)
	山 口 幸 生	(運動心理学・行動科学・テニス)
	吉 村 一 朗	(スポーツ整形外科学・解剖生理学)
	米 沢 利 広	(スポーツ方法学・バレーボール)
特任 教授	梅 田 保 人	(保健体育科教育学)
准 教 授	今 村 律 子	(保健体育科教育学・コミュニケーション論)
	坂 本 道 人	(コーチ学・柔道)
	信 岡 沙希重	(コーチ学・陸上競技)
講 師	神 田 智 浩	(コーチ学・スポーツ方法学・剣道)
	霜 島 広 樹	(スポーツ経営管理学・スポーツ産業論)
	渡 邊 正 和	(バイオメカニクス・コーチ学・硬式野球)

--	--	--

助	教		
	飯 竹 烈 士		
	大 塚 菜 々		
	川 崎 百合香		
	小 畠 廉 生		
	呉 屋 良 真		
	高 山 彩 田 中 璃 己		
	津 田 笑 佳 富 賀 裕 貴 中野渡 興 平		
	久 湊 太 雅 堀 田 明 里 松 永 武 人 三 浦 征		
	村 田 優 作		
	吉 田 一 也		

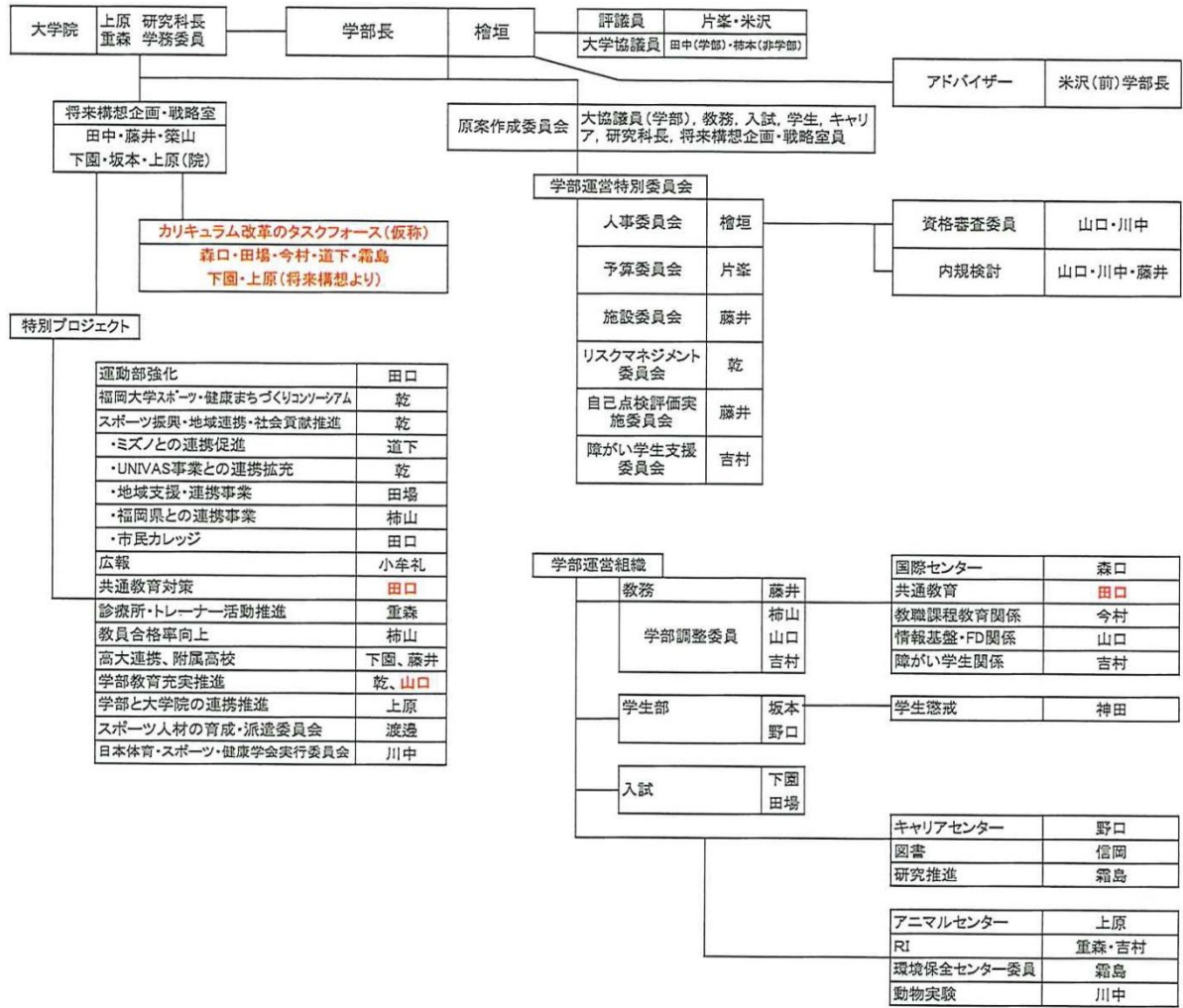
助 手

安 立 雄 斗 古 賀 恵
後 藤 佳 奈 佐 藤 功 一 佐 藤 滉 徳
島 元 順 平 崎 浜 江利奈
橋 口 欧 介 古 谷 莉 子
三 島 遥

大学院スポーツ健康科学研究科 担当教員（2024 年度）

スポーツ健康科学研究科長 上 原 吉 就			
教 授	青 柳 領	教 授	藤 井 雅 人
	上 原 吉 就		森 口 哲 史
	柿 山 哲 治		山 口 幸 生
	川 中 健太郎		吉 村 一 朗
	重 森 裕	准 教 授	今 村 律 子
	下 園 博 信		
	田 口 晴 康	講 師	霜 島 広 樹
	田 中 守	助 教	
	築 山 泰 典		富 賀 裕 貴
	布 目 寛 幸		三 浦 征
	檜 垣 靖 樹		

スポーツ科学部教職員組織図(2024.4.1～2025.3.31)



3 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義

(1) スポーツ科学部

下園 博信

■ 学校推薦型選抜

A 方式推薦入試（実技型・科目型）に関し、スポーツ科学科では、募集人員が 66 名で、実技型の志願者は 111 名、合格者が 59 名(競争率 1.9 倍)であった。科目型の志願者は 30 名で、合格者 7 名(競争率 4.3 倍)であった。また、健康運動科学科では、募集人員 18 名に対し、実技型の志願者は 14 名で合格者 10 名(競争率 2.0 倍)であった。科目型の志願者は 24 名で、合格者 12 名(競争率 2.4 倍)であった。両学科の競争率は実技型で 1.9 倍と 2.0 倍であり、募集人員の少ない健康運動科学において第 2 志望合格を継続実施している。

表 1 学校推薦選抜入試状況

学科	A 方式推薦入試（実技型/学力型）				
	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	64	111/30	111/30	59/7	1.9/4.3
健康運動科	18	14/24	14/24	10*/12	2.0/2.4

競争率＝受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）*欄は第二志望合格者(3 人)を含む

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ 総合型選抜入試、アスリート特別選抜入試

総合型選抜入試においては、スポーツ科学科に関して、募集人員 37 名に対し、志願者 124 名で合格者 37 名(競争率 3.4 倍)であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 5 名に対し、志願者 14 名で合格者 5 名(競争率 2.8 倍)であった。

次に、アスリート特別選抜入試に関しスポーツ科学科では、志願者 50 名に対し合格者 50 名(競争率 1.0 倍)、健康運動科学科では志願者 1 名に対し合格者 1 名(競争率 1.0 倍)、合計 51 名の合格者であった。アスリート特別選抜入試は、全学として 88 名の出願に対し 87 名の合格者であり、合格者に占める本学部への合格者の占める割合は 58.6%であった。

表 2 総合型選抜、アスリート特別選抜入試状況

学科	募集人員	志願者	合格者	競争率	募集人員	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	37	124	37	3.4	45	50	50	1.0
健康運動科	5	14	5	2.8	5	1	1	1.0
合計	42	138	42	-	50	51	51	-

競争率＝受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ 一般選抜入試

系統別日程では、スポーツ科学科が、募集人員 6 名に対し、受験者 92 名で合格者 31 名(競争率 3.0 倍)であった。また、健康運動科学科は、募集人員 3 名に対し、受験者 74 名で合格者 25 名(競争率 3.0 倍)であった。

前期日程では、スポーツ科学科は募集人員 37 名に対し、実技型においては受験者 184 名で合格者 6374 名(競争率 2.6 倍)、小論文型においては受験者 84 名で合格者 32 名(競争率 2.6 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 20 名に対し、受験者 158 名で合格者 59 名(競争率 2.7 倍)であった。

後期日程では、スポーツ科学科が募集人員 4 名に対し、受験者 17 名で合格者 4 名(競争率 4.3 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 2 名に対し、受験者 7 名で合格者 2 名(競争率 3.5 倍)であった。

共通テスト利用入試Ⅰ期では、スポーツ科学科が募集人員 7 名に対し、受験者 71 名で合格者 37 名(競争率 1.9 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 3 名に対し、受験者 41 名で合格者 25 名(競争率 1.6 倍)であった。

共通テスト利用入試Ⅱ期では、スポーツ科学科が募集人員 4 名に対し、受験者 44 名で合格者 21 名(競争率 2.1 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 2 名に対し、受験者 31 名で合格者 12 名(競争率 2.6 倍)であった。

共通テスト併用型入試では、スポーツ科学科が募集人員 5 名に対し、実技型においては受験者 69 名で合格者 28 名(競争率 2.5 倍)、小論文型においては受験者 33 名で合格者 16 名(競争率 2.1 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 3 名に対し、受験者 71 名で合格者 48 名(競争率 1.5 倍)であった。

表 3 系統別日程状況

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	6	93	92	31	3.0		305	240
健康運動科	3	74	74	25	3.0		328	238

表 4 前期日程状況

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	42	実技型						
		187	184	63	2.9		253	189
		小論文型						
		85	84	32	2.6		230	183
健康運動科	20	159	158	59	2.7		242	183

競争率＝受験者÷合格者

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

表 5 後期日程状況

学科	募集 人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	4	18	17	4	4.3
健康運動科	2	9	7	2	3.5

表 6 共通テスト利用入試 I 期

学科	募集 人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	7	72	71	37	1.9
健康運動科	3	41	41	25	1.6

表 7 共通テスト利用入試 II 期

学科	募集 人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	4	44	44	21	2.1
健康運動科	2	31	31	12	2.6

表 8 共通テスト併用

学科	募集 人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	5	実技型			
		70	69	28	2.5
		小論文型			
		33	33	16	2.1
健康運動科	3	71	71	48	1.5

表 9 編・転・学士入試

学科	志願者	受験者	合格者	競争率
健康運動科	1	1	1	1.0

表 10 スポーツ科学部特別募集

学科	募集 人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	若干名	3	3	3	1.0
健康運動科	若干名	0	0	0	-

競争率＝受験者÷合格者

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ 学生数及び卒業生数

表 11 学生数

(令和 7 年 3 月 1 日現在)

		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
スポーツ科学科	928	244	227	228	229
健康運動科	308	82	75	74	77
合計	1,236	306	293	292	294

■ 出張講義

2024 年度入学センターより依頼があり実施した出張講義・模擬講義数は 37 件(生徒総数 1,529 名)であった。依頼された総数は 46 件であった。

出張講義ガイドブック「福岡大学模擬講義 NAVI」には、本学部教員 20 名も掲載されている。また、「夢ナビライブ」にて、6 名の教員がオンラインで、学部説明を行い、高校生からの質問などに答えた。

■ 令和6年度実施入試状況

アスリート推薦入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	1	1	1

飛び級入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	0	0	0

一般入試

	秋季*			春季*		
	志願者	受験者	合格者	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	3(0)	3(0)	3(0)	2(0)	2(0)	1(0)
博士課程後期	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)

* () 内 社会人

外国人留学生入試

	秋季*			春季*		
	志願者	受験者	合格者	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	0	0	0	0	0	0
博士課程後期	0	0	0	1	1	1

推薦入試**

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	4(4)	4(4)	4(4)

** () 内 早期履修者数

■ 令和5年度 学生数及び修了生数

学生数

(令和6年3月1日現在)

		1年次	2年次 (留年者含む)	3年次 (留年者含む)
博士課程前期	25	16	9	
博士課程後期	12	2	6	4
合計	37	18	15	4

過去10年(H26～R5)の受験状況は、博士課程前期100名、博士課程後期17名の総計117名の入学であった。令和5年度は、博士課程前期修了14名が学位(修士号)を取得。博士課程後期修了者(博士号取得者)2名、満期退学者は0名であった。

4 教育活動

(1) 入学前教育

下園 博信

令和7年度の総合型選抜入試、アスリート特別選抜入試、学校推薦型選抜入試などの年内入試合格者を対象に、令和6年12月11日(水)18時より、『入学までの準備についてのアドバイスを行い、入学後の学部教育に関する理解を深めるとともに、入学前教育への取り組みを促す』ことを目的としたオンライン入学連絡会を実施しました。当日は、学部長、両学科長、入学センター委員、年内入試合格経験者(本学部助教)が参加し、合格者の参加者数は80名を超えました。また、外部業者と連携して、基礎国語5講、スポーツ科学入門7講、計12講からなる通信教育形式の入学前教育を実施しており、令和7年3月31日までに141名が受講しています。

基礎国語

- 1 講：PC時代に相応しい言葉力をつける・ノートを作る
- 2 講：ことばを自分のものにする(短文作り)
- 3 講：目の前のものを正確に描写する
- 4 講：自分を見つめる・他者を見つめる【実作1】
- 5 講：将来の夢について考える【実作2】

スポーツ科学入門基礎

- 1 講：「スポーツ科学」の研究領域
- 2 講：身体の構造と機能
- 3 講：フィットネス・トレーニング
- 4 講：スポーツのスキル
- 5 講：アスリートの身体管理
- 6 講：運動の効果とスポーツ損傷
- 7 講：データの処理

(2) 新入生懇談会

坂本 道人

新入生学部指導懇談会は、以下の内容を新入生に理解させ、活力ある学生生活となるための動機づけを行うものとして実施している。昨年同様午後から前後半に分けて開催した。

○主要内容

- 1) 福岡大学の校訓を理解し、充実した学生生活を送るための諸注意。
- 2) スポーツ科学部生としての自覚を促し、スポーツ活動に専心する心構えと勉学に励む態度を啓発する。

- 3) 学部専門教員紹介ならびに各教員によるグループディスカッションを行い、学生生活を円滑に送るための相互理解を深める。

○令和6年度スポーツ科学部新入生学部指導懇談会

1) 前半

<日 時> 令和6年4月8日(月曜日) 13:00~15:00

<場 所> 823 教室

<方 法> 対面形式

<内 容> ①学部長あいさつ

②城南警察署による講話(城南警察署員)

③保健センター健康支援室のご案内(職員)

④保健センター学生心理相談室のご案内(職員)

⑤学生部ガイダンス(学生部委員)

2) 後半

<日 時> 令和6年4月8日(月曜日) 15:30~

<場 所> 第二記念会堂フロア

<次 第> ・学部教員スタッフ紹介

・グループディスカッション(全教員クラス担任別懇談会)

(3) クラス面談・修学指導

坂本 道人

■ クラス面談について

スポーツ科学部では、1・2年次生を対象にクラス別個人面談(グループディスカッション)を実施している。クラス別個人面談は、講師以上の専任教員が10~12名程度のクラスを担当し、定期的に学生の実態調査を行うもので、学生の生活状況や生活態度を把握するとともに、学生に対する注意喚起を行っている。大学生活における授業、所属する運動部やサークル等の課外活動、アルバイト等の活動における問題点や悩みなどに対応し、個々にアドバイスできるような指導体制で取り組んでいる。実施された面談については以下の通りである。

1) 新入生を対象とした個人面談

前期:4月8日(月)、7月1日(月)~7月12日(金)

後期:9月25日(水)4限(14:40~16:10)フレッシュマンセミナー

※開催日時:9/25(水)~10/4(金)

2) 2 年次生を対象とした個人面談（前後期に各 1 回：対面）

前期：5 月 13 日（月）～ 5 月 24 日（金）

後期：9 月 30 日（月）～ 10 月 18 日（金）

1 年次生は、学士課程の教育充実を図るために基礎教育と導入教育を目的とした「フレッシュマンセミナー」が開講されており、その授業の 1 コマ（後期）を活用しクラス面談を実施している。

2 年次生は、継続的な指導として、1 年次に担当した教員により引き続き個別指導が実施され、前・後期に面談を実施している。

3 年次生以降は、必修科目である卒業論文の事前指導として開講されている「スポーツ科学演習」を全学生が履修するため、各担当教員のゼミナールにおいて卒業まで個別に指導が展開されている。

スポーツ科学部では、このような取り組みによって徹底した学生の指導体制を構築しており、学生においても 4 年間の充実した学生生活が期待され、その成果は非常に大きいと考えられる。

■ 修学指導について

スポーツ科学部は、前述した通り全学生を対象としたクラス別個人面談のほか、修学指導対象の学生に対して面談を実施している。クラス面談に加えて主に修学的な指導が必要な学生を対象に教務委員、学生部委員、入試委員、教務関係担当教職員によって修学指導を実施している。また、令和 3 年度より、修学指導対象基準に GPA を取り入れ更なる指導体制の充実を図っている。対象となる学生は以下の通りである。

【修得単位数および GPA の基準】（表 1）

- 1) 2 年次生：1 年次の修得単位数が 23 単位以下の学生（登録単位数の半分以上の学生が対象）
- 2) 3 年次生：2 年次までの修得単位数が 46 単位以下の学生
- 3) 4 年次生以降：3 年次までの修得単位数が 77 単位以下の学生（卒業見込みなし）
- 4) GPA 等が学部等における下位 4 分の 1 の範囲に属する学生

面談については、今年度は、従来どおり、1221 教室において対面形式で実施した。

内容については、修学指導記録書に「なぜ単位を取れなかったのか？」「今後の対応はどうするのか？」といった点を記録して学生の指導を行った。単位修得不振学生は、「授業の欠席が多いこと」「試験勉強が十分にできなかったこと」「試験そのものができなかったこと」などを理由に挙げている。1 年次には、安易に単位が修得できると油断して単位を取得できなかった学生や、試験勉強の方法がわからないといった学生も散見された。このような点を踏まえて、試験勉強に対する助言・指導、授業への出席指導、今後の進路に対する助言・指導を行った。また、高等教育の修学支援新制度の学業要件（表 2）とも絡

め、文部科学省の定める学習意欲と学習成果を測る要件を満たさない場合には、制度が停止または廃止されることも有り得ることも併せて指導した。

(表 1) スポーツ科学部学部・年次別の単位修得不振者の状況 (%)

	令和 5 年度入学生 (23 台)	令和 4 年度入学生 (22 台)	令和 3 年度入学生 (21 台)
修得単位	30 単位以下	60 単位以下	90 単位以下
スポーツ科学部	11.1	7.6	10.3

父母懇談会のしおりより一部抜粋 (令和 6 年 4 月 1 日現在)

(表 2) 高等教育の修学支援新制度の学業要件

※☆令和 7 年度から要件が変更になります。

警告（支援は継続）となる要件	廃止（支援打ち切り）となる要件
<ul style="list-style-type: none"> ・出席率が 8 割以下【変更なし】 ⇒上期 15 回の授業のうち欠席が 3 回以上 ・修得単位数が 6⇒7 割以下☆ ⇒単位数が、 1 年生……18⇒21 単位以下 2 年生……37⇒43 単位以下 3 年生……55⇒65 単位以下 4 年生……74⇒86 単位以下 (卒業に必要な単位数が 124 単位の場合) ・GPA (成績評価) が、 所属する学部等の下位 4 分の 1 【変更なし】 	<ul style="list-style-type: none"> ・修業年限内で卒業・修了ができないことが確定【変更なし】 ・出席率が 5⇒6 割以下☆ ⇒半期 15 回の授業のうち欠席が 8⇒6 回以上 ・修得単位数が 5⇒6 割以下☆ ⇒単位数が、 1 年生……15⇒18 単位以下 2 年生……31⇒37 単位以下 3 年生……46⇒55 単位以下 4 年生……62⇒74 単位以下 (卒業に必要な単位数が 124 単位の場合) ・警告要件に 2 回連続で該当【変更なし】 ※2 回目の警告が GPA 要件のみの場合は、 支援打ち切りではなく、次の判定まで支給停止

(令和 6 年 11 月 13 日教授会資料)

本セミナーは、学生自身が「如何に学び、社会に貢献するか」について自問自答しながら自学自習を実践し、スポーツ科学部生としての規範とスポーツ科学部で学ぶ専門領域を理解し、卒後の進路と目標をできるだけ早期に明確化できるようになることを目的としている。

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に変更された令和5年度に引き続き、令和6年度もコロナ禍以前と同様の対面形式による授業実施となった。通常はクラス分割を求められる300人以上の受講生ではあったが、823教室を1年間使用し、1クラスで実施することとなった。授業内容は、1) 檜垣学部長による講話「スポーツ科学部生として、理論と実践が融合した文武合一のすすめ」、2) スポーツ科学部各種委員等による関連事項の説明、3) リアセック社コンピテンシーテストの受験およびフォローアップ講座の実施、4) アカデミック・ライティングの指導、5) スポーツ科学部専任教員による専門性を活かした講義、6) スポーツ科学部全教員による1年次生に対するクラス別個人面談、7) ブレインストーミングの実践、8) ベネッセGPS-academic受験およびフィードバック動画の視聴、などで構成されている。以下に、特筆すべき取り組みについて記載する。

・コンピテンシーテストは、平成30年度以降、2年次後期必修科目「ステップアップセミナー」での同テストの実施に合わせる形で、リアセック社の「PROGコンピテンシーテスト」を学部予算により実施している。コンピテンシーとは、リアセック社によれば、「対課題基礎力」（課題発見力、計画立案力、実践力）、「対人基礎力」（親和力、協働力、統率力）、「対自己基礎力」（感情制御力、自信創出力、行動持続力）の3つのキー・コンピテンシー（およびその下位構成能力）から成る「自分を取り巻く環境に働きかけ、実践的に対処する力」を意味する。診断テストの結果については、各自の結果報告書による個人フィードバック、および訓練を受けたリアセック社の講師が行う授業でのフォローアップ講座による全体フィードバックがなされる。その際、学生には、初年次生として大学生活を始めるにあたって、各個人が自分自身を客観的に理解し、今後その「強み」や「課題」についてどのように取り組んでいくのかをイメージしながら、付録の「ワークシート」を活用してコンピテンシー強化のための具体的な目標設定を行うように指導がなされている。令和6年度は、4月24日に筆記式のコンピテンシーテストが実施され、6月26日に各人へ結果報告書が返却されるとともに、全体に向けたフォローアップ講座が開催された。なお、コンピテンシーテストでは、令和2年度よりスポーツ科学部独自アンケート調査も併せて実施しており、学部として両者を関連させた分析に取り組み、これまでもスポーツ科学部主催FDワークショップなどで分析結果を報告している。

・令和4年度より継続実施しているアカデミック・ライティングの指導については、前期開講のフレッシュマンセミナーIにおいて山口幸生が4回にわたり担当した。そこでは、敬語も含めた基本的な日本語の言葉づかいにはじまり、接続詞の正しい使い方、小論文とレポートの相違点、文章評価の観点、説得力ある論理展開の方法、剽窃の禁止、引用の仕

方、参考文献の記述方法等といった、大学生の学びに不可欠なアカデミック・ライティングについて学習され、最後に各自にレポートの提出を求めた。提出されたレポートは、後期開講のフレッシュマンセミナーⅡで夏休み明けに実施されたクラス別個人面談の際に、各クラス担任よりフィードバックがなされた。

・令和6年度フレッシュマンセミナーでのスポーツ科学部専任教員による各専門領域に関する講義は、前年度主に1年次必修講義科目を担当しない教員が1コマ1名の構成で実施していたのに対して、1コマ2名構成で全教員が行うことにした（ただし、各種委員等が各自の専門領域の講義に加えて、関連事項の説明を行う場合は1コマ1名構成で実施した場合もある）。フレッシュマンセミナーの目的の1つとして「スポーツ科学の専門性を俯瞰的に理解すること」を掲げているわけであるが、学生が各教員の講義を通してその多様な専門性に触れることができ、スポーツ科学部での学びの全体像の理解につながったものと思われる。

・令和6年度フレッシュマンセミナーⅡにおいて、教務課からの依頼に基づいてベネッセキャリア社のGPS-Academicを全受講生が受験することとなった。GPS-Academicは、答えが1つでない問いに対して問題を解決する力を「思考力」（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）「姿勢・態度」（レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション）「経験」（自己管理、対人関係、計画実行）という3つ観点で測定するものである。フレッシュマンセミナーⅡでは、受講者を2グループに分けて、薬学部CBT教室において1グループずつ2回にわたってweb受験させた（受験していないもう一方のグループは、別教室でブレインストーミングを実施）。その後、福岡大学入学試験実施日であった11月20日の授業休講の補講として、授業以外の時間でのGPS-Academicの一環である「学生意識調査」への回答、GPS-Academicの結果に関するフィードバック動画の閲覧、ワークシートの作成を課した。大多数の者がこれらの課題を終えることができ、受験結果についての個人のフィードバック情報を基に、今後の大学生活を有意義に過ごすためのヒントを得ているようであった。

フレッシュマンセミナーでは、初年次教育として大学での積極的な受講態度も含めた「学び方を学ぶ」という側面を大切にしてきたわけであるが、以上のような特徴的な取り組みを通して、そうしたねらいが少なからず達成されたものと思われる。

2024 年度 1 年次開講 スポーツ科学部フレッシュマンセミナー I (前期)

○「スポーツ科学部生として如何に学び、社会にどのように貢献するか？」考えよう、そして実践しよう！

○提示された課題について、ミニッツペーパーに自分の考えをまとめてみよう！

回数	1 (823 教室)	2 (823 教室)	本講座のねらい
日付	4 月 17 日	4 月 24 日	
1 年次生 全員	○檜垣学部長 スポーツ科学部に望むこと ○上原研究科長 大学院紹介+感染症予防指導 ○山口先生 大学における情報端末活用 FU ポータル使用法やメールマナー ○司会進行：藤井先生 (丸善雄松堂による電子教科書購入説明を含む)	○藤井先生 リアセック社コンピテンシーテストの実施 (山口先生による日本語能力基礎調査オンライン受験説明を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校までの“生徒”ではなく“学生”としての学び方・態度・行動を身に付ける ・スポーツ科学部生としての規範を身に付ける ・学生としての基本である“自学自習”を実践する ・スポーツ科学部教員の専門領域を理解する ・卒業後の進路および目標を明確にする ・「如何に学び、社会に貢献するか」を考え、実践する

回数	3 (823 教室)	4 (823 教室)	5 (823 教室)	6 (823 教室)
日付	5 月 1 日	5 月 8 日	5 月 15 日	5 月 22 日
1 年次生 全員	○坂本先生 大学生活、特に薬物への注意喚起 (「夜回り先生」の講演動画を視聴)	○今村先生 +教職、コース制について	○乾先生 +福岡大学による地域貢献、「FU スポまち」について (UNIVAS との関連含む)	○森口先生 国際センター関連事業について (JICA 派遣報告、および交換留学報告を含む)

回数	7 (823 教室)	8 (823 教室)	9 (823 教室)	10 (823 教室)
日付	5 月 29 日	6 月 5 日	6 月 12 日	6 月 19 日
1 年次生 全員	○山口先生 アカデミック・ライティング 1	○山口先生 アカデミック・ライティング 2	○山口先生 アカデミック・ライティング 3	○山口先生 アカデミック・ライティング 4

回数	11 (823 教室)	12 (823 教室)	13 (823 教室)	14 (823 教室)
日付	6 月 26 日	7 月 3 日	7 月 10 日	7 月 17 日
1 年次生 全員	○藤井先生 コンピテンシーテストフォローアップ講座 (リアセック社近藤氏によるフォローアップ講座)	○米沢先生 ○藤井先生	○梅田先生 ○川中先生	○森口先生 +定期試験、夏季休暇中の安全教育などについて (FURIKA の実施を含む)

2024 年度 1 年次開講 スポーツ科学部フレッシュマンセミナー II (後期)

○「スポーツ科学部生として如何に学び、社会にどのように貢献するか？」考えよう、そして実践しよう！

○提示された課題について、ミニッツペーパーに自分の考えをまとめてみよう！

回数	1 (823 教室)	2 (823 教室)	3 (823 教室)	4 (823 教室)
日付	9 月 18 日	9 月 25 日	10 月 2 日	10 月 9 日
1 年次生 全員	○上原先生 ○築山先生	○クラス別個人面談 (第 2 記念会堂フロア集合 の後、クラスごとに実 施)	○田場先生 ○霜島先生	○神田先生 ○吉村先生

回数	5 (823 教室)	6 (823 教室・17 号 館)	7 (823 教室・17 号 館)	8 (823 教室)
日付	10 月 16 日	10 月 23 日	10 月 30 日	11 月 6 日
1 年次生 全員	○野口先生 ○布目先生	○檜垣先生、柿山先生 ブレインストーミング (A グループ：823 教 室) ○藤井先生 ベネッセ GPS- Academic (B グループ：17 号館 PC 教室)	○檜垣先生、柿山先生 ブレインストーミング (B グループ：823 教 室) ○山口先生 ベネッセ GPS- Academic (A グループ：17 号館 PC 教室)	○信岡先生 ○重森先生

回数	9 (823 教室)	10 (823 教室)	11 (823 教室)	12 (823 教室)
日付	11 月 13 日	11 月 27 日	12 月 4 日	12 月 11 日
1 年次生 全員	○小牟礼先生 ○柿本先生	○村上先生 ○下園先生	○渡邊先生 ○田口先生	○田中先生 ○片峯先生

回数	13 (823 教室)	補講対応
日付	12 月 18 日	11 月 20 日 (推薦入試のため休講)
1 年次生 全員	○道下先生 + 定期試験、卒業論文発 表会、コース制、冬季・ 春季休暇中の諸注意など について (FURIKA の実施を含 む)	○補講 各自ベネッセ GPS- Academic の結果のフィー ドに関するオンデマンド 動画を視聴し、ワークシ ートを作成・提出すると ともに、その受験時に回 答できなかったアンケー トに改めて web 回答する ことで補講とした

1) 本講座のねらい

本講座の主たる目的は、部活動と就職活動の両立が求められる本学学部生に、就職活動と社会人に必要な能力の理解を深め、体育・スポーツの専門教育で培ってきた強みを生かせるよう、将来を見据えた学生生活のあり方を考えさせることにある。

主な内容は、①キャリアセンターからの就職進路状況をはじめ、本学部生の特性や興味に沿った外部講師（公務員、健康運動指導士、スポーツ関連企業、現役教員、現役内定取得者など）による講義。②ジェネリックスキル育成への期待が高まっている状況を受け、PROGテスト（株式会社リアセック）とフォローアップセミナー。③大学スポーツ協会（UNIVAS）と連携し、UNIVASとマイナビ（株）で共同開発された「UNIVASデュアルキャリアプログラム」といったキャリア教育。これに併せて、各授業の冒頭で企業の採用試験に用いられるSPIテストを実施し、自身の現状把握および就職活動に向けた準備を進めている。

2) 今年度の取り組み

昨年度の外部講師の講義では、健康運動指導士の方に依頼していたが、本学部は一般企業に就職を決める学生が多いため、今年度は日本生命保険相互会社、ミズノ株式会社、西日本新聞者の方に講義いただき、一般企業への就職を考える内容に変更した。また、キャリアセンターからの講義では、学生が本学開催の就職支援行事に関心を高め、より就職活動へ実践的な活用ができるよう企業研究の方法を実施した。

3) 成果と課題について

今年度の本講座に対する学生の授業コメントは以下のとおりである。

第2回（9月21日）キャリアセンター

今日の講義を受けて、初めてこんなに詳しく進路のことについて話を聞くことが出来て今のうちから考えておくことが大事なのだと改めて思った。私も教員になりたいと思っていて企業などは私に関係ないと思って、興味を示していなかったが、実際教員になった時に生徒に進路指導ができるように、教員以外の職業にも自分のことと捉えて身に触れて行きたいと思った。（GS 女子）

第4回（10月10日）講師：玉村紗弥 氏（日本生命保険相互会社）

今回の講義では、日本生命の方の話を聞いた。自分の中で特に重要だと思ったのは、選択肢を持つために努力するということだ。話をしてくださった方も教員免許を取得し、その上で就活も行っていたということなので、一つに絞るのではなく、自分も選択肢を増やせるように努力したいと思う。（GH 男子）

第5回（10月17日）講師：舩田晏堂氏（ミズノ株式会社）

今日の講義では、ミズノに勤めている方が来ていただいた。人に与えられた時間は皆平等にあるので、その与えられた時間をいかに有効活用するかが大事だと思った。様々な経験が、就職活動となった時に、生かされると仰っていたので、チャンスなどを逃さず、今できることをしっかりやっていきたいと思った。（GS 女子）

第6回（10月24日）講師：小笠原麻結氏（西日本新聞社）

今回の講義では就職にするにあたって大事なことをたくさん学びました。ストーリーがある人の説得力。相手も自分も納得して仕事選び。面接は自分を出すところ。ブレブレだとばれる。すごく響きました。就職をするにあたってたくさん悩むことや周りから反対されることもあると思いますけど、自分のやりたいこと、やりがい、をみつけて一生懸命やることが大事だなと思いました。（GS 男子）

第8～10回（11月7日～11月21日）講師：UNIVAS デュアルキャリアプログラム

主体性のある人間を目指すという副産物を得られるということを学んだ。主体性と自主性の違いを理解し、主体性を持つ価値も理解することが出来た。特に自責思考が主体性を向上させ、VUCAの時代において自分でキャリアを切り開いてけるという言葉が印象に残っている。現在私は社会人基礎力と課題設定力、課題解決力を鍛えられる福岡市課題解決型プログラムに取り組んでいる。そこでも主体性が求められているため、どれだけリーダーシップを発揮しながら仲間の良さや主体性・自主性を引き出せるかを考えて行動して行きたい。（GH 男子）

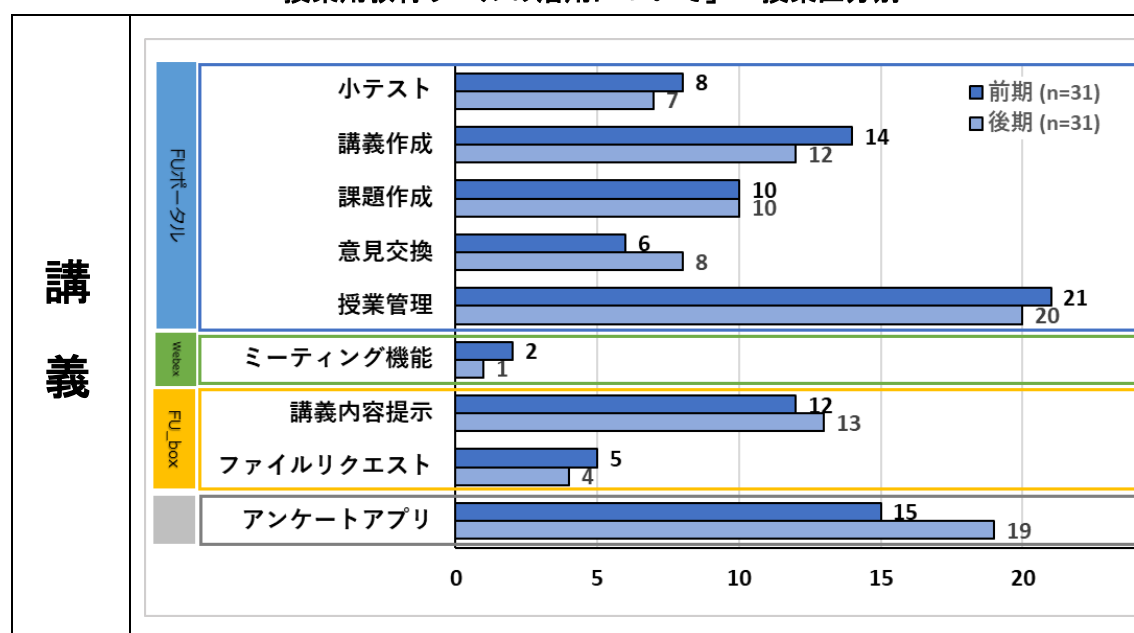
以上が今年度の講義に対するコメントの抜粋である。どのコメントからも講義を通して就職に対する興味・関心の高さが窺え、自身の今後に向けて考える良い機会になったと捉えられる。また、就職活動に対する意識調査では、「自身の就職活動に対して、どの程度意識していますか？」という質問に対し、“意識している” “少し意識している”と回答した学生が、授業前に比べて、授業後で増加していた。この結果からも本講座が一応の成果を得られたと判断できる。しかし、全国大学求人倍率や本学に寄せられる求人件数はコロナ過前の水準に回復し、学生を取り巻く就職状況は毎年大きく変化している。本講座においては、それらの変化に対する迅速な対応が求められるため、今後も担当教員ならびに関係各位と連携を図りながら、学生の就職状況に適した講義内容の計画に努めていきたいと考えている。

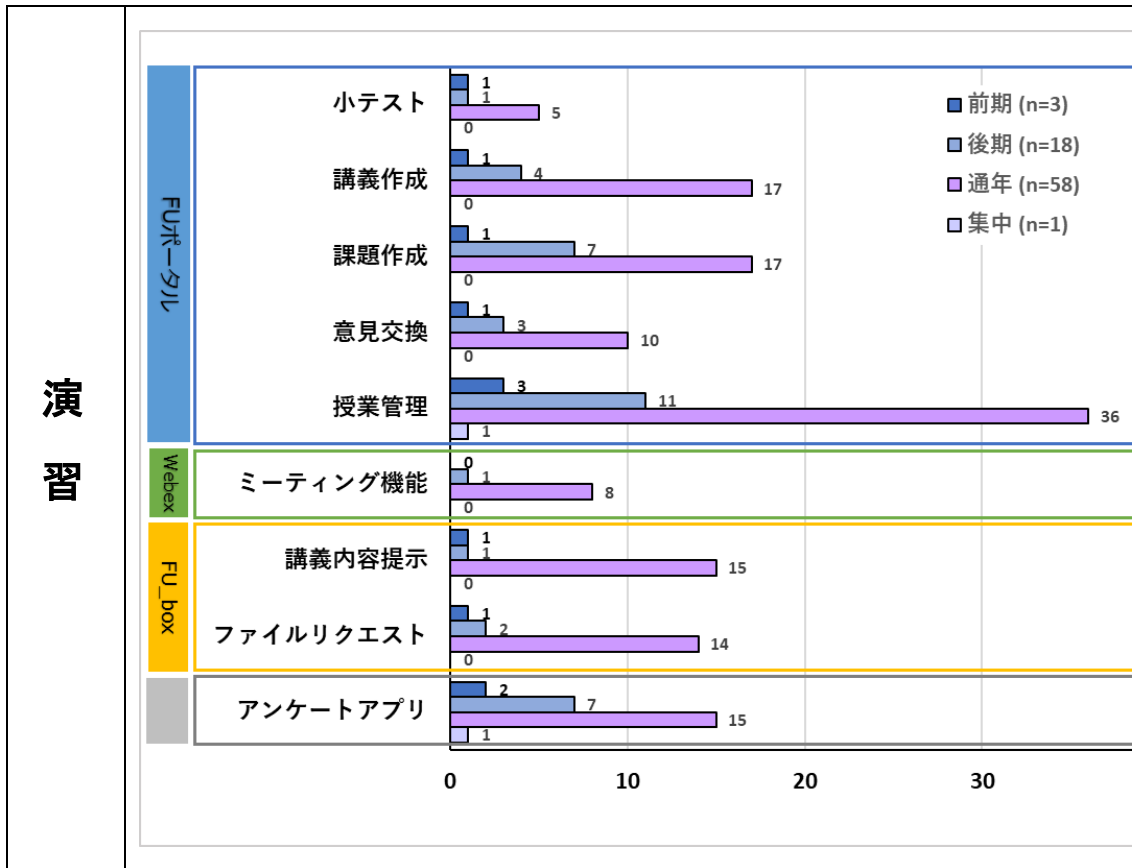
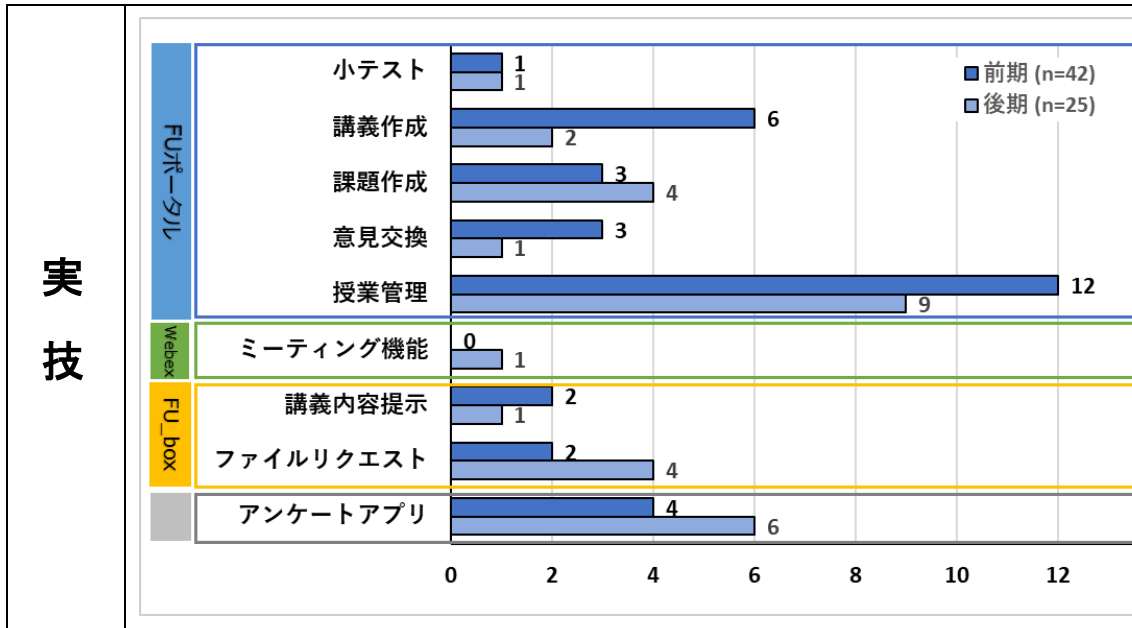
スポーツ科学部の専門科目について、非常勤講師を除いた学部教員（講師以上）を対象に、「授業用教材ツールの調査」を行った。令和6年度は、原則対面形式で授業が実施され、出張等の場合で、授業2講義分を遠隔形式（オンデマンド）の実施も可能であった。

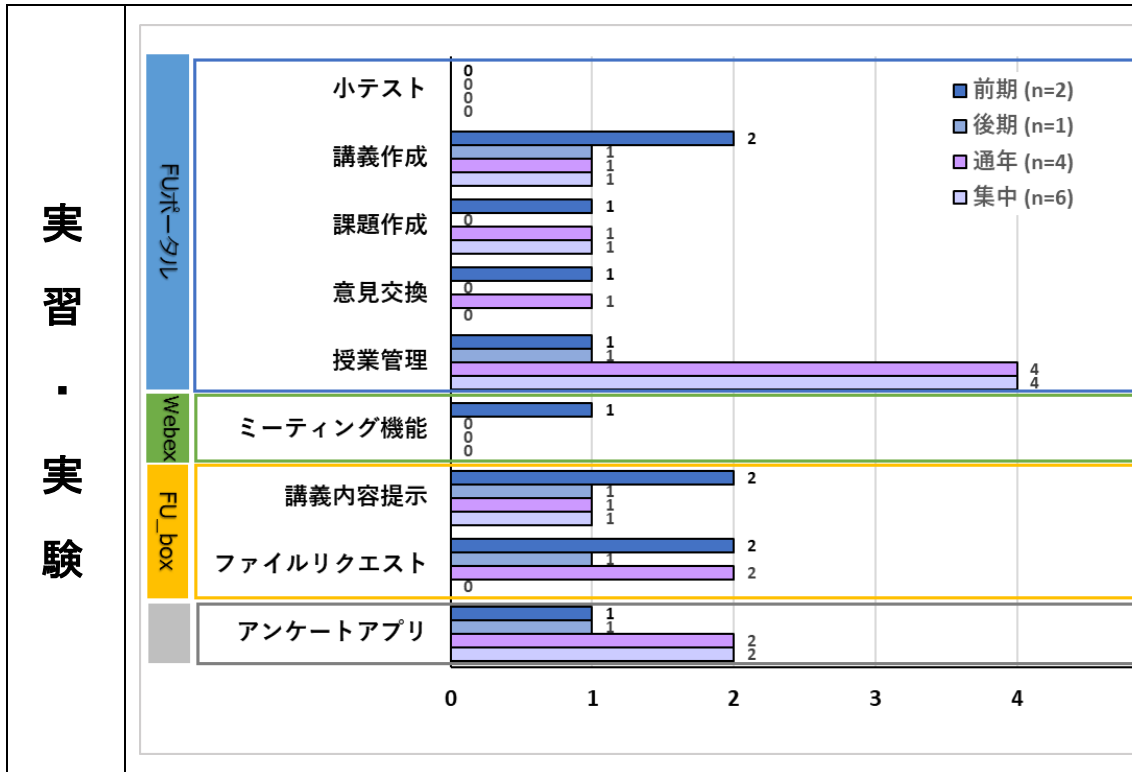
下記は、授業用教材ツールとして大学で提供されているシステムのうち、「授業用教材ツールについての調査」の結果である。授業用ツールとして、【FU ポータル】－小テスト機能（前アンケート作成）、講義作成（講義内容の提示）、課題作成（課題提出機能）、意見交換（BBS 掲示板機能）、授業管理（連絡機能・cis メール自動送信も含む）、【Webex】－ミーティング機能、【FU_box】－講義内容提示（サイズ容量無制限）、ファイルリクエスト（課題提出機能）、Web アンケート機能ソフト（Google フォームや Microsoft Office365 の Forms）について、各授業で使用した授業用ツールの使用について調査を行った。本年度の報告対象は、主担当者の科目で、167 科目 222 コマ（1 科目複数コマをカウント）を対象とした。

スポーツ科学部は 2023 年 4 月より BYOD に移行開始から 2 年目となったこともあり、授業内においての学生自身のノートパソコンおよびタブレット使用についての調査を加えた。BYOD が実施されていた授業は主に演習であり、10 人前後のスポーツ科学演習や卒業研究論文での使用であった。

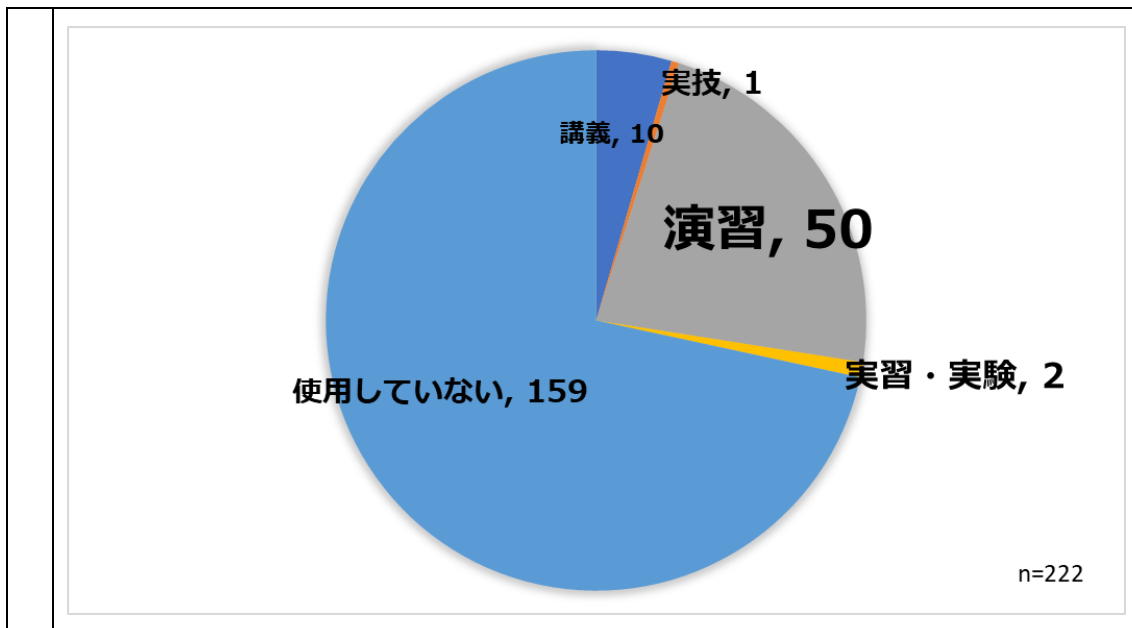
「授業用教材ツールの活用について」－授業区分別







「授業区分別 BYOD 授業数」



5 研究活動

(1) スポーツ科学部

霜島 広樹

■ 共同研究プロジェクト

- ・バンドー化学㈱との共同研究では「AT メジャーを用いた足関節外側靭帯損傷患者における術前後/後療法の経過管理によって早期スポーツ復帰を促せる管理指標の研究」といったテーマにて研究が行われている。
- ・国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所との共同研究では「末梢血流の促進は糖尿病－サルコペニアの併存疾患治療に寄与するか?」といったテーマにて研究が行われている。

(2) スポーツ健康科学研究科

霜島 広樹

スポーツ健康科学研究科博士課程前期では、8月に中間報告会を対面形式にて実施した。2月の修士論文発表会も対面形式にて実施し、最終的には8名が最終試験に合格した。その中で田中景梧氏（川中ゼミ）が、参加した教員の採点で最高点を獲得し、優秀発表賞を受賞した。大学院教員ならびに大学院生の活躍や社会貢献は、学部紀要のみならず大学公式ウェブサイトや大学院のホームページにも随時紹介し、社会や地域、企業に対して広く情報を発信している（<https://www.spo.fukuoka-u.ac.jp/graduate/>）。

国際交流に関しては、釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流会が会場を隔年ごとに持ち回ることによって実施されているが、令和6年度については残念ながら中止となった。

6 FD・SD 活動

(1) シラバス点検

藤井 雅人・山口 幸生

スポーツ科学部では、毎年教務委員が中心となって、非常勤講師を含むスポーツ科学部専門教育科目担当教員から提出された次年度用の全シラバスの確認作業を行っており、2023 度で 14 年目を迎えることとなった。

令和 6（2024）年度シラバスの確認作業は、2024 年 2 月 7 日に、スポーツ科学科の確認作業担当者（森口哲史、今村律子、田場昭一郎、霜島広樹）、健康運動科学科の確認作業担当者（下園博信、山口幸生、長島和幸）、および確認作業担当者作成分確認者である藤井雅人（教務委員）によって実施された。その際、「福岡大学 シラバスチェックリスト」、および教務部長による「シラバス記載内容のチェック体制の整備について（お願い）」の「要チェック事項」の内容に基づいて、「授業の進行・方法の記載」「授業形態、概要、授業の進行・方法、アクティブ・ラーニングの内容の整合性」「授業時間外の事前事後学習時間の適切な記載」「授業計画における授業担当者の記載」「授業アンケート FURIKA の実施の記載」等の項目を中心に確認を行った。これらのポイント等について不備が確認されたシラバスについては、科目担当者に修正の上、再提出するよう求めた。その後再提出されたシラバスの修正箇所についての確認を行い、2 月 26 日までに全ての確認作業を完了した。

こうした確認・修正の取り組みもあって、スポーツ科学部専門教育科目のシラバスは全体的に見て、「令和 6 年度 シラバス（授業計画書）作成のためのガイドライン」に則って適切に記載された内容に統一された。

また、共通教育科目における保健体育科目のシラバスについても、共通教育センターの依頼を受けて、2024 年 2 月 6 日までに、点検作業担当者である田口晴康（共通教育センター長補佐）が確認作業を行った。その際に「到達目標」「授業計画」「授業時間外の学習」などの記述について統一的な修正が必要なシラバスが多く確認されたため、田口と藤井が 2 月 26 日の修正期限までに修正し、共通教育センターに再提出した。再提出されたシラバスは 3 月 7 日にウェブ上で公開された。

大学院スポーツ健康科学研究科の「令和 6 年度 大学院シラバス記載内容に係るチェック作業」は、チェック作業担当者である川中健太郎および道下竜馬、チェック作業担当者作成分確認者である重森 裕（研究科学務委員）によって実施された。その際に記載に不十分な箇所があるとされたシラバスについては、必要に応じて当該作成者に記載内容の改善等を求めた。その後再提出されたシラバスの修正箇所を確認し、2024 年 3 月 4 日までに全チェック作業を完了した。

(2) 学外研修参加

藤井 雅人・山口 幸生

2023 年度における学外 FD 講習会への参加状況は下記の通りであった。なお、学外実技研修会への参加者はいなかった。

・2023 年 2 月 26 日に追手門学院大学総持寺キャンパスにて開催された、公益社団法人 私立大学情報教育協会「FD のための情報技術研究講習会」に山口幸生が参加した。この講習会では、「講義映像を活用した反転授業の効果的なデザインを考える」、および「生成 AI を活用した授業の取組み」という 2 つの全体会の後に、そこでの知見を活かす形で「1 コマから反転授業を実践しよう！：対面授業における講義映像の活用法」、および「対面・オンライン授業での ICT 活用」というワークショップが開催された。山口により作成された詳細な報告書は、2024 年度 4 月開催の第 1 回目のスポーツ科学部教授会（2024 年 4 月 10 日）において報告され、講習内容の情報共有が図られる予定である。なお、本研修会への参加には、大学からの「FD 活動経費」が用いられた。

また、下記のように、複数人の教員が対面形式による 2 つの研修会に参加した。ただし、教授会報告等での情報の共有はなされなかった。

・九州地区大学体育連合夏期研修会（九州体育・スポーツ学会との合同企画）（2023 年 9 月 9 日：J:COM ホルトホール大分）に、藤井雅人ほか複数人の教員が参加した。花内 誠氏（九州産業大学）による「部活動地域移行時代の大学スポーツーカギを握るハイブリッド型組織ー」と題する話題提供を受けて、部活動の地域移行という課題に大学スポーツがいかに関わっていくことができるのかを議論した。

・九州地区大学体育連合「ー2023（令和 5）年度春期ー体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」（2024 年 3 月 11・12 日：ホテル龍登園（佐賀））に、柿山哲治ほか複数名の教員が参加した。第 1 日目に開催されたシンポジウム「部活動地域移行と大学の役割」では、乾 真寛が演者として登壇した。また村田優作らが一般研究発表を行い、優秀発表賞を受賞した。

（3）セミナー、研修会の開催

藤井 雅人・山口 幸生

スポーツ科学部では、平成 30 年度より「PROG コンピテンシーテスト（株式会社リアセック）」による 1、2 年生のコンピテンシー測定とその分析や、FD ワークショップおよびセミナー実施を通して、学部教育の質向上を図る取り組みを行ってきた。本年度のセミナーでは新たな方向性として、近年大きな注目を集める「生成 AI」に着目し、学部教育への活用を検討するための基本的情報を共有することを目的とした。本年度の FD セミナーは令和 7 年 1 月 17 日（金）に実施された。当日は「Webex Meetings」を利用した LIVE 配信で実施し、全 81 名が参加した。参加学部の打ち分けは、スポーツ科学部 59 名、薬学部 13 名、教育開発支援機構 4 名、商学部、工学部、医学部各 1 名、その他 2 名であった。

セミナー講師は北海道医療大学の二瓶氏であった。二瓶氏は、高等教育における生成 AI 活用で日本の先頭を走っている方であり、2023 年私立大学情報教育協会賞受賞、2024 年 e Learning Award 文部科学大臣賞受賞をされている先生でもある。

二瓶氏には、所属大学における取り組みの経緯や、具体的な実践事例（AI に役割を持たせた個別最適化学習の実践）およびその教育的成果について話題提供いただいた。具体的には、まず北海道医療大学では、①AI が学生のノートやレポートの文章チェックを行い、他のクラスメイトがどのような用語でノートをまとめているのかチェック、②AI がグループワークをコーチング、③AI が学生の習熟度に合わせて最適な演習問題を提示する、ことが行われている事を紹介いただいた。また「生成 AI が演じる教員」がおり、API 版 gpt-4.0 を用いて、学生自身が自分のレポートを個別添削できる取り組みについても紹介された。

本セミナーに参加いただいた先生方からは、セミナー当日および終了後のアンケート調査で以下の感想・意見をいただいた。まとめると全体的には、1) 生成 AI の活用について、多くの参加者が興味を持ち、その進化の速さに驚いていたこと、2) AI を授業に組み込むことで、教育の効率化や新たな学習アプローチが可能になると認識していたこと、3) 生成 AI の活用にはメリットだけでなく課題もあり、特に学生の学習姿勢や思考力の育成への影響を懸念する声もあったこと、などが挙げられる。また今後の活用のアイデアとして、1) 教材作成やフィードバックの補助として AI を活用し、教育負担を軽減する、2) AI を使ったロールプレイング（異分野の視点を取り入れることで、新たな知見を得る）、3) 卒業論文指導において、AI を活用し PC 操作の指導負担を軽減する、といった意見が出ていた。

AI 活用に関する参加者の具体的な懸念点としては、1) 生成 AI への依存による考える力の低下や暗記力への影響、2) AI の回答精度や情報の正確性、誤情報の拡散のリスク、3) 学生間の格差の拡大（活用できる学生とそうでない学生の差）、4) 教員の役割が変化する可能性（講義形式の授業への影響）、が挙げられていた。

今後は、AI を学びのツールとして使う際の指導方法の確立し、AI の正確性と信頼性を理解し、批判的思考力を養う教育が必要であると思われる。以上のように、本 FD セミナーはその開催趣旨を踏まえた内容となったものと思われる。

大学院スポーツ健康科学研究科主催 FD 研修会「食事、運動、加齢、そして筋肉」が、2024 年 6 月 18 日に、英国ノッティンガム大学の臨床代謝・分子生理学部門の Dr Bethan E Phillips ならびに Dr Philip J Atherton を迎えて対面とオンラインのハイブリッド形式によって実施された(第二記念会堂 1211 教室)。参加者は対面とオンラインの合計で約 80 名であった。Dr Bethan E Phillips からは『運動や食事による術前リハビリテーション』について、主に骨格筋に着目した研究内容を紹介いただいた。また、Dr Philip J Atherton からは『運動・栄養素に対する骨格筋適応に及ぼす加齢の影響』について、重水素水を用いたユニークな安定同位体トレーサー法による最先端の研究内容を紹介いただいた。講演後は活発な質疑応答が行われ、また、その後の懇親会によって研究交流が深められた。

またスポーツ科学部では例年、旧年度末から新年度はじめにかけて、特に新任助教・助手を対象とした研修会を実施している（ただし現任助教・助手も可能な限り参加が求められている）。2023 年度研修会は、旧年度の 3 月 23 日より開始され、4 月 10 日まで行われた。主な研修内容として、福岡大学およびスポーツ科学部での教育目標・活動についての理解、助教・助手の学部運営業務の引継ぎ等とともに、共通教育科目である保健体育科目「生涯スポーツ演習」での実技指導を念頭に置いた実技研修が実施された。具体的には、生涯スポー

ツ演習で教材として取り上げられているサッカー、バレーボール、ソフトボール、バスケットボール、テニスといったスポーツ種目について、当該種目を専門とするスポーツ科学部専任教員より研修を受けた。また、生涯スポーツⅠ「フィットネス」の授業展開を念頭に置いた、体操フロアでの運動指導、ボールを用いたウォーミングアップ、フライングディスクやカローリングといったニュースポーツ指導の研修のほか、緊急時対応や AED での救助法の研修なども行われた。これらの研修での成果を踏まえて、新任助教・助手（現任助教・助手も含めて）は、新学期より学生教育に携わっていくことになった。

（４）授業アンケート

藤井 雅人・山口 幸生

2023 年度の授業アンケート FURIKA は、前期 7 月 4 日～8 月 11 日、後期 12 月 12 日～1 月 16 日の期間で実施された。2023 年度前期および後期の「授業アンケート資料集（学外公開版）」によれば、スポーツ科学部専門教育科目についての「回答率」（回答学生数／履修学生数）は前期 62.1%、後期 50.8%（大学全体の回答率は前期 46.4%、後期 37.0%）、「実施率」（回答率 30%以上の回答科目／対象科目）は前期 86.4%、後期 62.9%（大学全体の実施率は前期 70.0%、後期 56.7%）であった。前年度と比較して、回答率は前期 3.5%、後期 6.6%向上し、実施率は前期 5.2%、後期 8.8%上昇した。FURIKA が導入された 2018 年度前期（「回答率」82.3%、「実施率」97.3%）には及ばないものの、例年より高い回答率・実施率であった。

また、全スポーツ科学部専門教育科目のシラバスに示されている到達目標についてのスポーツ科学部生の「到達度」を、スポーツ科学部ディプロマ・ポリシーに即して見てみると、「学部長・センター長／学位（教育）プログラム責任者・学部単位の登録者」のみが閲覧可能な「分析（レポート）」によれば、平均して「知識・理解」は前期 4.1 および後期 4.3、「技能」は前期 4.4 および後期 4.5 となり、例年と同様に非常に高い値を示した（5 点が最高点）。「態度・志向性」については、その到達目標を掲げる科目がほぼ開講されていない前期の記載はなく、後期は 4.5 であった。また、授業への主体的・積極的な取り組みを示す「積極性」については前期 4.3 および後期 4.4、授業内容の理解に関わる「理解度」についても前期 4.3 および後期 4.4 となり、到達度と同様に高値となった（ともに 5 点が最高点）。ただし、授業外での「1 回の授業に対する学習時間」は前・後期ともに 1.5 にとどまった（「1：0-30 分未満」「2：30-60 分未満」）なお、2023 年度より「FU プラスアップ授業」がどの程度自身の学習の促進に役立ったかについての質問はなされなくなった。

共通教育科目における保健体育科目を個別に対象とする FURIKA の結果については、例年どおり前後期ともに示されていなかった。

以上のように、2023 年度前・後期の FURIKA の全体的な結果からは、例年と同様に、スポーツ科学部生が専門教育科目の授業での「到達度」「積極性」「理解度」に関わる自らのパフォーマンスを高く評価していることがわかる。ただし、授業外での「1 回の授業に対する学習時間」については、コロナ禍で原則遠隔形態での授業を余儀なくされたことのいわば付随現象として増加していた（例えば 2020 年度前期は 2.5）状況から、昨年度より面接（対

面) 形態での授業にほぼ完全に戻ったことで 1.5 へと減少している。シラバスで 1 単位当たりに必要な授業時間外学習の目安が示されるようになる中で、今後も授業外での適切な学習時間の確保に向けた様々な工夫(例えば、座学での学習理解を運動部活動などでの実技に意識的に活かすための取り組みや、授業で得られた知見を青少年のスポーツ指導などを通して地域社会に還元する試みなどを学習時間とみなす)が求められよう。

実施率については、後期が前期に比べて低下する傾向はこれまでと変わらなかった。これも例年どおりであるが、教務課から入手した資料によれば、こうした実施率の低さの要因として、FURIKA を実施したとしても、当該科目の受講者総数に占める回答者の割合が 30% 未満であることにより未実施科目に分類されてしまっているという点、また特に 3 年生および 4 年生のゼミナールでの実施率が低い(回答者が少ない)という点を指摘できることから、担当教員による回答率の増加のための働きかけ次第で実施率は上昇するものと思われる。担当教員を中心とする今後の改善が望まれる。

この FURIKA の特徴の 1 つとして、担当教員、学位(教育)プログラム責任者の教員、学生にそれぞれきめ細やかなフィードバック情報をウェブ上で提供していることが挙げられるが、2023 年度も学生や教員によってそうした情報が十分に活用されているとはいえない状況であった。ただし、スポーツ科学部生によるフィードバック情報の閲覧率については上昇傾向が見られた(前期は全学部生の 22.7%、後期は 13.9%)。とはいえ、例年フレッシュマンセミナーやステップアップセミナー、3 年生および 4 年生のゼミナールなどにおいて、担当教員に、前後期第 1 回目の授業でのフィードバック情報を閲覧する時間の確保や、そうした情報から得られる学びや気づきの重要性等についての説明・指導を依頼しているが、学生には FURIKA 実施の意図や意義があまり伝わっていないという現状がある。教員自身が FURIKA の意義を十分に理解した上で、引き続き学生に粘り強く働きかけていくことが必要であろう。

教員によるフィードバック情報の活用については、依然としてスポーツ科学部全体での組織的・体系的な活用ができていないこともあり、個々の取り組みに依存しているところがある。引き続き改善が必要であろう。ただ一方で、FURIKA 実施後のフィードバック情報の公開に際して、非常勤講師を含む学部専門教育科目および保健体育科目の担当者に、「この授業であなたが学んだことは何でしょうか」という質問に対する受講生の記述回答(いわゆる「学生コメント」)の公開選択(現在は自動的にすべての「学生コメント」が公開となるように設定されているため、担当教員が公開を望まないコメントを選択する必要がある)、およびその「学生コメント」を受けての「教員コメント」の記入(2021 年度より本学部では担当教員による記入を義務化)について説明・依頼しているが、他学部と比較してもかなり積極的な担当教員の対応が見られる。例えば、教務課から入手した資料に基づき「教員コメント」の記入率を見ると、学部専門教育科目は前期 76.9%および後期 69.6%、保健体育科目は前期 66.7%および後期 73.1%と非常に高い。このように、まだ組織的・体系的な活用には至っていないものの、担当教員によるフィードバック情報の活用意識は高まってきていると評価できる。ただし、これまでと同様に、特定の教員のコメント記入がなされていない傾向も見受けられるので、担当教員に対する一層の啓蒙は必要であろうし、これ

らの成果が、フィードバック情報を閲覧する学生に深い学びや新しい気づきを与えるきっかけとなるような工夫（例えば、教員コメントの内容を、学生コメントへのリプライの要素を強調したものにする）も求められよう。

また、大学院スポーツ健康科学研究科も1月5日～1月14日にかけて、博士課程前期および後期の全在学者（休学中および退学予定の2名を除く）29名を対象にFDアンケート調査を実施し、15名による回答を得た。そこでは、「研究指導満足度」について90%強が「大変満足」「満足」と回答し、昨年よりも肯定的な回答傾向がみられた。「特論満足度」については、90%弱が「大変満足」「満足」と回答しており、昨年度の60%強という割合から大きく改善した。またその中で、「大変満足」と回答した者の割合が60%に達している。確かに年度によって「特論満足度」に高低は認められるものの、全体的に見れば、特論の講義内容については概ね高い質を保証できているものと思われる。

7 スポーツ振興・地域連携・社会貢献・高大連携

乾 真寛・小牟礼 育夫・柿山 哲治・下園 博信・田場 昭一郎

■ スポーツ振興・地域連携・社会貢献

1. 福岡大学スポーツ・健康まちづくりコンソーシアム(略称：FU スポまち)

令和4年9月に設立された共同体だが、令和5年度は、参画団体として新たに福岡 SUNS（アメフトリーグ所属）や明治安田生命株式会社などを加えて、全18団体で活動の更なる拡大と充実を図った。

令和5年度は、30事業約5700人の参加者がFU スポまちの事業に参加され、福岡市のスポーツ参画人口の拡大や小学生の体力向上プログラムの実施、中学校部活動地域移行に関しても、福岡市教育委員会や城南区6中学校の校長会とも連携してトライアル事業を実施して大きな成果を挙げた。

(1)「大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出支援事業」に採択
スポーツ庁・UNIVAS（大学スポーツ協会）の公募事業に3年連続採択され、大学スポーツ資源を有効活用したモデル事業として成果を挙げた。

また、コンソーシアム事業の継続と自走化を目指して、大学内に一般社団法人FUSCを設立し、事業の発展を目指す基盤ができた。

(2) 中学校部活動地域移行トライアル事業

城南区にある6中学校を対象に、サッカー、バレーボール（女子）、剣道、陸上の4種目について、10月～12月の期間中に4～8回集合型部活動として中学生が大学スポーツ施設を利用した週末の部活動地域移行を試験的に実施した。

指導した学生たちは、事前の研修会受講やオンラインゼミ受講が条件であり、120名の学生たちが参加した。

参加した中学生は、延べ630人であり大学用の施設で大学生による活動を体験した。中学生や部活動顧問教師からのアンケート調査では、高い評価を得ることができた。

令和6年度は、福岡県がスポーツ庁より地域クラブ活動重点地域（全国7県）に指定されたことにより、福岡県庁の教育委員会やスポーツ局との連携により福岡県全体を対象とした県域に事業を拡大していった。福岡大学と九州共立大学の2大学が中心となり、県内2企業と連携して、「福岡県アスリート人材活用コンソーシアム」を設立し、アスリート人材の活用方法についての実証事業を行い、福岡市以外の8市町に指導者（社会人、学生）を派遣した。

また、令和5年度に引き続き、城南区6中学校を対象とした、大学施設への参集型部活動も実施し、延べ800名近くの中学生在が参加した。

2. ミズノ株式会社との協力協定による具体的活動の拡充

- ・授業への講師4名派遣協力（ピークパフォーマンス演習Ⅰ・水曜2限）

- ・タペストリーの作成、掲示、スポーツブランド力向上に寄与
- ・スポーツ科学部生の指定ウェア、A強化部のユニホーム、ジャージの統一
- ・ミズノスポーツ振興財団への応募、採用、助成金支給

一般社団法人 FU スポーツコミュニティ、地域スポーツ振興部門で年間 100 万円の助成金（令和 6 年度分）が支給されることになった。

3. UNIVAS 事業との連携拡充

・「大学スポーツ資源を活用した地域振興モデル創出支援事業」では、UNIVAS からの公募事業に 3 年連続採択され、令和 7 年 2 月には成果報告シンポジウムがあり、福岡大学の事業紹介とパネルディスカッション、ポスター発表に参加し、成果を全国の大学へ発信した。

・UNIVAS AWARDS

本学は、3 部門で表彰された。特に大学スポーツのプロモーション部門では、サッカー部のホーム戦イベント「FUKUDAI Soccer Festival 2024」が優秀賞を受賞した。

・2 年次生必修のステップアップセミナーの正課授業内で、UNIVAS とマイナビ社の人間力向上セミナーを全 3 回実施し、アスリート人材向けの人間力向上プログラムを使っの講師セミナー、ワーク、振り返りなどの取り組みを実施した。

4. 福岡県・福岡市との連携事業

○アクションとの連携強化

1) アクアスポーツ実習

「福岡大学とアクション福岡の教育連携協定」の申請により、2024 年 9 月 5 日（木）アクション福岡の福岡県立総合プールを借用して、履修生 20 名がダイビング実習を実施した。

○福岡県教育委員会との連携

・外部講師による特別講義（教育実習事前・事後指導）

- 1) 4 月 10 日（水）1 限：大賀雄史先生＜福岡県教育庁教育振興部社会教育課・社会教育主事＞「学校と地域との連携について」の講義を依頼した。
- 2) 4 月 10 日（水）2 限：作本佳隆先生＜福岡県教育庁教育振興部義務教育課 教育相談室・指導主事＞「生徒指導について」の講義を依頼した。
- 3) 12 月 2 日（月）5 限：瀬尾博栄先生＜福岡県立筑紫高等学校・校長＞「これからの保健体育科教員に期待するもの」について講義を依頼した。

・外部講師による特別講義（教職演習Ⅰ）

- 1) 6 月 25 日（火）1 限：秋田瑞弘先生＜福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課・指導主事＞「保健体育科の学習の在り方」について講義を依頼した。
- 2) 7 月 9 日（火）1 限：古沢昭一先生＜宗像市立河東中学校・校長＞「保健体育科教員に期待するもの」の講義を依頼した。

・外部講師による特別講義（教職演習Ⅱ）

1) 6月25日（火）3限：吉廣精人先生＜福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課・指導主事＞「部活動の地域移行について」について講義を依頼した。

○福岡市との連携

1) 6月6日（木）：福岡市教育委員会と連携して、福岡市内の小学校・中学校の教職員を対象に、水泳の指導力向上を図ることを目的として、福岡大学公認室内プールにて、水泳授業における指導方法に関する研修会および実技指導、意見交換会を実施した。

2) 11月23日（土）～11月26日（火）：福岡県スポーツ局と連携して、福岡大学公認室内プールに豪州 NSW 州（Japan Open 出場選抜チーム）を受け入れて、交流練習会を実施した。

5. 社会連携センターとの連携事業

2023 年度に実施された地域支援および連携イベントの実績として、スロージョギング支援（ふくおか健康づくり県民会議）及び那珂川市と福岡大学との連携協定に基づく支援（運動指導）が継続して実施された。また、企業や自治体、スポーツ団体と連携した共同体である福岡大学スポーツ・健康まちづくりコンソーシアム（FU スポまちコンソーシアム）と関連付けた事業も 2023 年度に引き続き展開した。子ども、社会人、高齢者、障がい者などすべての人に対して「誰もが、あつまり、ともに、つながる」をテーマにスポーツをする場の機会の創出を実現し、今後も持続的に大学、企業、自治体、スポーツ団体が連携・協力して地域のスポーツにおける課題を共有し、解決に取り組む予定である。

＜参画機関＞

1) 自治体

・福岡市市民局スポーツ振興部・教育委員会指導部・福祉局障がい者部

2) 自治体関連団体

・福岡市スポーツ協会・福岡市障がい者スポーツ協会
・福岡市立障がい者スポーツセンター（さんさんプラザ）

3) 企業

・KIRIN キリンビバレッジ・MIZUNO・Azure sky・明治安田生命保険相互会社
・KURIYAMA JAPAN

4) スポーツ団体

・AVISPA FUKUOKA・RIZING GEPHYR・KYUDEN VOLTEX・ANCLAS
・福岡 SUNS・SoftBank HAWKS

6. 市民カレッジスポーツ講座

市民カレッジスポーツ講座は、コロナ禍が緩和された令和 4 年度後期から「キッズ・サッカークラブ」「女性のための元気体操」の 2 講座が再開され、これに加えて令和 5 年度はキッズ体操教室も再開された。各講座とも受講生の評価も高く、今後も継続していくことが決

まっている。一方、組織体として 2024 年度から社会連携センター・JTB の管轄から「FU スポまち」コンソーシアムに移行されることから、FU スポまちで行われる講座との関連も含め、今まで以上の活性化が期待される。

＜2023 年に実施された地域支援および連携イベント＞

1) FU スポまち：福岡大学スポーツ・健康まちづくりコンソーシアムの関連事業

- ・スポーツふれあい教室(2024. 9)
- ・中学校部活動地域移行トライアル事業集合型部活動指導 (2025. 2)
- ・福岡大学市民カレッジ講座 (2024. 5～)
キッズサッカー (7 回) キッズ体操 (10 回) 元気体操教室 (12 回) 大人のラグビー教室 (5 回) 剣道公開講座 (5 回)
- ・キリンビバレッジ小学生対象サッカー教室：城彰二 (2024. 9)
- ・キリンビバレッジ小学生対象サッカー教室：前園真聖 (2024. 10)
- ・福岡市教育委員会共催：教員向け体力向上のための指導者研修会 (2024. 11)
- ・部活動生のためのカラダづくり講座 (2024. 11)
- ・ふれあいスポーツフェスタ 2024 障がい者サッカー (2024. 12)
(精神障がい・視覚・聴覚・交流会)
- ・野球教室：福岡大学野球部 (2024. 12)
- ・ふれあいスポーツフェスタ：みんなでバスケ (2024. 12)
(知的障がい・聴覚障がい者バスケ交流会)
- ・第三回監督が怒ってはいけない大会：益子直美 (2025. 02)
(指導者・保護者向け講演会・小学生向け講演会も前日開催)
- ・アンガーマネジメントセミナー (2025. 02)

2) 小学校との関連事業

- ・体育授業における水泳授業サポート (2024. 07) 金山小学校
- ・体育授業におけるサッカー指導 (2025. 01) 弥永小学校・横手小学校

3) 福岡県および福岡市との連携事業

- ・競泳エリート小学生を対象とした福岡県ジュニア強化練習会 (2024. 06)

■ 高大連携

高大連携事業は、主に福岡大学附属大濠高等学校、福岡大学附属若葉高等学校と行われている。令和 3 年度に附属若葉高等学校は共学校としての完成年度を迎え、学友会活動ではサッカー部、ハンドボール部、水泳部では強固な連携体制が構築でき、特にサッカー部においては優れた競技実績を残すことができた。また、令和元年からは福岡市立四高等学校との連携も始められた。

【附属大濠高等学校】

9 月 附属大濠高等学校模擬講義 (2 年生総合的な学習「福大講座」)

【附属若葉高等学校】

9 月 本学部教員が 1 年生を対象に模擬講義を行なった。

12 月 本学部教員が 2 年生を対象に模擬講義を行なった。

また、複数の学友会活動において練習等の協力体制が構築されている。

8 国際交流

森口 哲史

■ 国際センター関連事業

1. 学部生に対する情報提供

新入生に対する対面式情報提供は、5月のフレッシュマンセミナー講義内で実施

2. 国際センタープログラムを活用した交換留学・海外研修・海外語学研修

・交換留学；スポーツ科学部 0名

・海外研修；スポーツ科学部 0名、健康運動科学部 2名、計 2名

(ウォッシュバン大学・アメリカ；選考試験あり)

(セントラルランカシャー大学・イギリス；選考試験なし)

・海外語学研修；スポーツ科学部 0名、健康運動科学部 0名、計 0名

3. 福岡大学国際交流チーム（FIT）登録者

2024年度 スポーツ科学部；2名（GS 1名、GH 1名）

■ 大学間学術協定 MOU、教員海外研修

1. 2023年度～2024年度 長期在外研究

布目寛幸 教授（研究期間；2023年9月から2024年8月まで）

ドイツケルン体育大学（German Sport University Colonge）

2. 2024年度～2025年度 長期在外研究

田場昭一郎 教授（研究期間；2025年2月から2026年1月まで）

西オーストラリア大学（The University of Western Australia）

3. 2024年9月

中国の天津体育学院（体育学部）と本学スポーツ科学部が、5年間の部門間学術協定を締結。

9月25日、天津体育学院（中国）の張欣学長が永田潔文学長、檜垣靖樹スポーツ科学部長を表敬訪問され、部門間学術協定に関する協議、署名がなされた。

（2025年4月1日から開始）

4. 2025年3月

マレーシアのマラ工科大学と本学の大学間学術協定について、5年間の協定延長が認められた

（2025年4月1日から開始）

■ 留学生関係

1. 外国人留学生数

大学院博士後期課程 0 名、博士前期課程 0 名、学部留学生 0 名

学部聴講生 1 名

(ウクライナ国立体育スポーツ大学学生 2024 年 4 月～2025 年 3 月)

2. 学部留学生入学試験

スポーツ科学部；受験者 0 名、合格者 0 名、入学者 0 名

3. 短期留学生の受け入れ

スポーツ科学部；志願者 0 名

■ 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム

1. アスリート・コーチ育成プログラムによる海外研修

JICA 大学連携短期ボランティア 2025 年 2 月 5 日～2025 年 3 月 4 日

派遣先；中南米ボリビア多民族国

派遣学生；男子学生 7 名（サッカー部 男子 5 名、野球部 男子 2 名）

■ 大学院学術交流

1. スポーツ健康科学研究科と釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流

(中断中)

2. スポーツ健康科学研究科と部門間学術協定を結んでいる国立台湾護理健康大学の学生 4 名（大学院生 2 名、学部生 2 名）が本学を訪問され、約 1 か月間の学術研修及び学生間交流を行った。2024 年 7 月 4 日～8 月 5 日まで。その後、本学からは、大学院生 2 名、学部生 1 名（早期履修生）の計 3 名が、8 月 12 日～8 月 24 日まで、国立台北護理健康大学で短期学術研修を実施した。

また、協定プログラムにおける教員学術交流の一環として、2024 年 11 月 29 ～ 11 月 30 日に台湾の国立台北護理健康大学にて開催された 2024 International Conference on Smart Exercise Health and Adaptive Sports において、上原吉就研究科長が keynote speech の講演を行った。

3. スポーツ健康科学研究科とマラ工科大学との学生交流および研究活動に関する部門間協定の継続が承認された。2024 年 10 月 16 日にマラ工科大学訪問団が来日し、上原研究科長と協定継続に関する協議が行われた。

新しい協定期間：2025 年 4 月 1 日～2028 年 3 月 31 日（3 年間）

9 教職課程

柿山 哲治・今村 律子

■ 教職課程登録者数（2024 年度）

学部	学科	24 台	23 台	22 台	21 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	146	122	105	78	451
	健康運動科	63	46	34	32	175
合計		209	168	139	110	626

■ 社会教育主事課程科目登録者数（2024 年度）

学部	学科	24 台	23 台	22 台	21 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科		0	0	0	0
	健康運動科		0	0	1	1
合計			0	0	1	1

■ 教員免許状取得状況（2024 年度）

* 卒業生数に 21 台以前も含む

学部	学科	卒業生*	免許状取得者数	免許状取得率
スポーツ科	スポーツ科	211	75	35.5%
	健康運動科	67	27	40.3%
合計		278	102	36.7%

■ 教員免許状（一種・専修）一括申請者数（2024 年度）

学部	学科	申請者数	中一種	高一種	申請件数
			保健体育	保健体育	
スポーツ科	スポーツ科	74	39	74	113
	健康運動科	30	22	30	52
スポーツ健康科学研究科		7	6	7	13
科目履修生		5	5	4	9
合計		116	72	115	187

■ 保健体育教員コース（学部推奨カリキュラム）

3 年次生を対象としたコース選択について、「保健体育教員コース」へ 35 名の希望があった。志望理由書の提出等の一次書類選抜を行い、二次面接を経て 30 名を合格とした。28 名は、「保健体育教職演習Ⅰ」「教職事前実習」を履修しており、教育実習および教員採用試験に向けた実践的な指導を受けた。また、夏期・春季には勉強会や模擬試験受験を実施した。

4 年次生は「保健体育教職演習Ⅱ」を履修し、授業内で教科指導力をより向上させ、教員採用試験対策も同時に行った。教員採用試験の一次試験を通過した者に対して、当学部の教員によって、夏期休業期間に二次試験対策（模擬授業・面接・実技種目）を実施した。他のコース所属者に対しても対策の相談を受け、一次を通過している者に二次対策支援を行った。

■ 教員採用試験合格者数

＜一次試験合格者＞ 30 名（含複数合格者） ※内 23 名が保健体育教員コース

1 名（岡山県中学校、3 年次チャレンジ枠によるもので 4 年次の
一次試験免除） ※保健体育教員コース

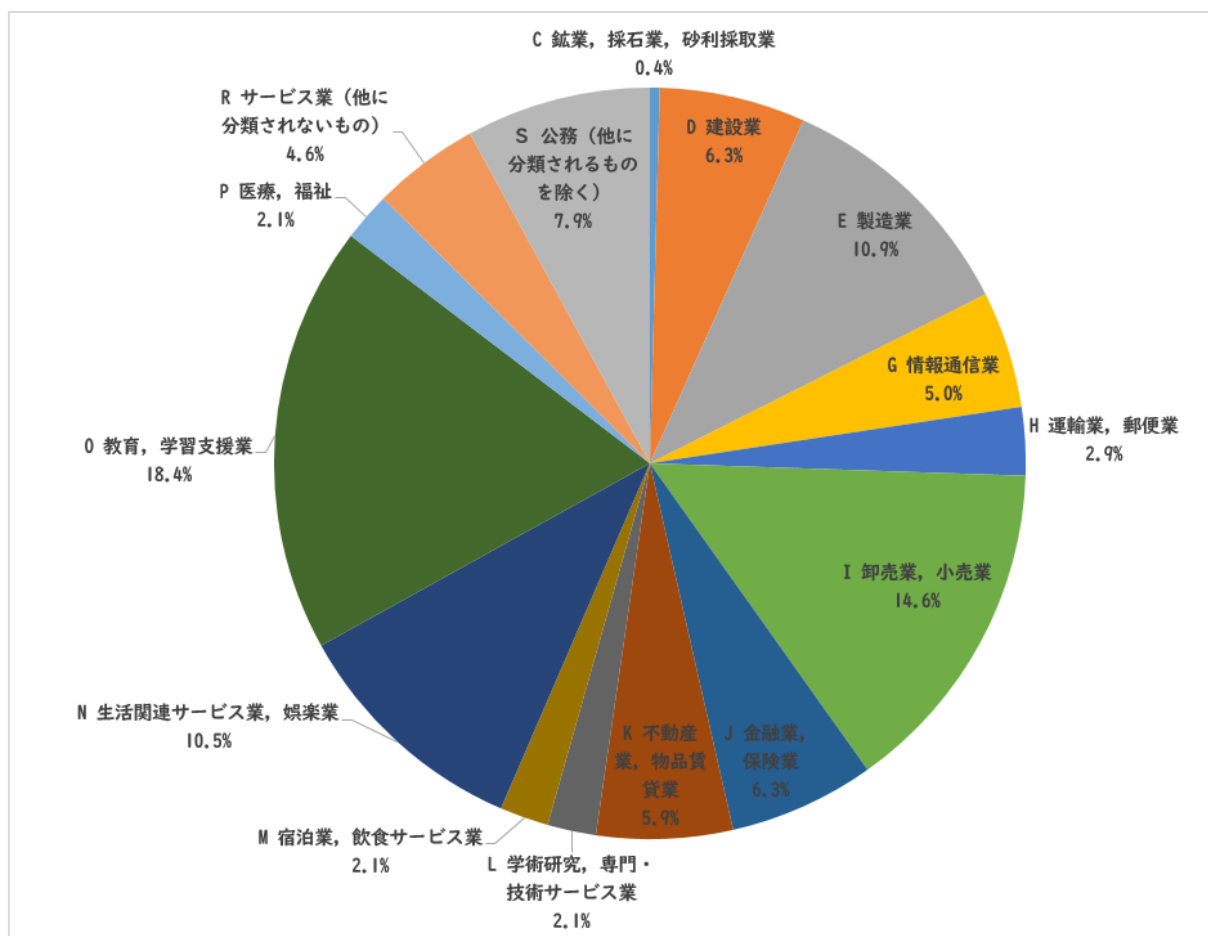
＜最終合格者＞ 14 名＜福岡市中学校 2 名、北九州市中学校 1 名、福岡県中学校 4 名、
長崎県中学校 1 名、熊本県中学校 1 名、香川県中学校 1 名、島根県中学校 1 名、広島県中
学校 1 名、福岡県高等学校 1 名、佐賀県高等学校 1 名＞ ※内 12 名が保健体育教員コース

10 就職・進路

(1) スポーツ科学部

野口 安忠

令和6年度は企業の採用活動意欲は依然として高く、全国大卒求人倍率は1.75倍と0.04ポイント上昇し（リクルートワークス研究所調べ）、本学に寄せられた求人件数も20,189件と7.1%増加した。就職率は大学全体で97.3%（0.1ポイント増）と同水準であったが、本学部においては全体で98.4%（1.2ポイント減）、男子97.5%（1.8ポイント減）、女子100.0%（同）と男子の就職率が微減した。なお、就職先の業種別内訳については円グラフに示したとおりである。



令和6年度 スポーツ科学部における就職先の業種別内訳

◇主な就職先

(株) 一条工務店、(株) 九電工、栗田工業(株)、エーザイ(株)、パラマウントベッド(株)、リンナイ(株)、(株) アイシン、トヨタ自動車東日本(株)、日本製鉄(株)、アイリスオーヤマ(株)、TOTO(株)、SCSK九州(株)、(株) NTTデータ・フィナンシャルテクノロジー、エフサステクノロジーズ(株)、九州旅客鉄道(株)、西日本旅客鉄道(株)、(株) アステム、アルフレッサヘルスケア(株)、持田製薬(株)、三菱電機住環境システムズ(株)、

山下医科器械（株）、（株）新出光、ヤマエ久野（株）、福岡トヨタ自動車（株）、（株）鹿児島銀行、（株）肥後銀行、（株）福岡銀行、日本生命保険（相）、九州労働金庫、（株）ジャパネットホールディングス、アイ・ケイ・ケイ（株）、（株）P l a n・D o・S e e、（株）ルネサンス、福岡県教員（中学校）、福岡県教員（高校）、佐賀県教員（高校）、広島県教員（中学校）、福岡市教員（中学校）、北九州市教員（中学校）、日本赤十字社、九電産業（株）、（株）J A L ナビア、公益財団法人福岡市スポーツ協会、国税専門官、鹿児島県庁、大牟田市役所、福岡県警察本部、長崎県警察本部、横浜市消防局、呉市消防局など

（２）スポーツ健康科学研究科

重森 裕

令和６年度、前期課程修了者の就職先は、株式会社オリバー（１名）、株式会社ライフネス（１名）、S o c i o F u t u r e 株式会社（１名）、富士通 J a p a n ソリューションズ九州株式会社（１名）、有限会社サワラスイミングスクール（１名）、福岡県中学校教員（１名）であった。３名は、博士課程後期進学（就職と同時に進学１名）した。なお、後期課程の修了者はありません。

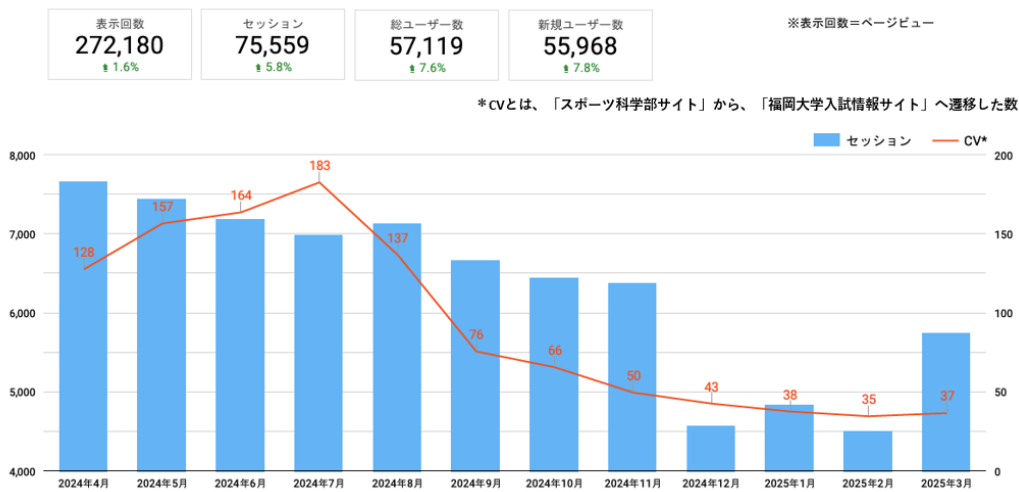
11 広報推進

小牟礼育夫・上原吉就・下園博信・森口哲史・今村律子・岡部奈央・村山さら

■ 学部ホームページアクセス解析

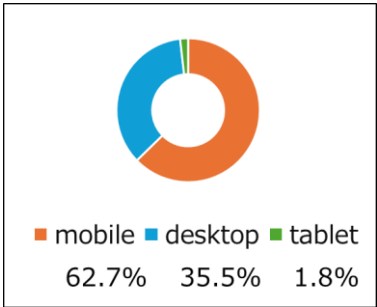
アクセス解析ツール（Google アナリティクス）を使用し、本学部サイトのアクセス状況をまとめているが、本年度から仕様が変更されたため、これまでと共通するアクセス状況、デバイス別アクセスと都道府県別アクセスランキングを示す(2024/4/1～2025/3/31 調べ)。

月別アクセスユーザー数



アクセスユーザー数（月別）

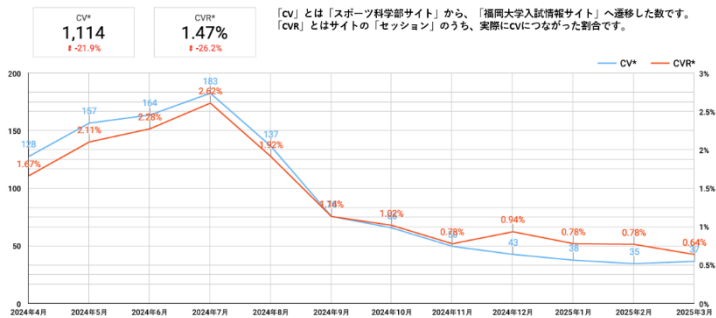
都道府県別ユーザー数 Top10



デバイス別アクセスの割合

	地域	セッション
1	Tokyo	24,934
2	Fukuoka	21,389
3	Osaka	4,588
4	Kumamoto	1,904
5	Hiroshima	1,813
6	Nagasaki	1,320
7	Hokkaido	1,255
8	Kagoshima	1,172
9	Saga	1,160
10	Yamaguchi	1,046

コンバージョン分析



■ 学部 HP の更新

「注目！令和 8 年度スタートの新カリキュラムについて」というタイトルのコンテンツを掲示。令和 8 年度から開始される新カリキュラムについて資料を公開し、詳細をダウンロードして確認できるようになっている。

■ デジタルサイネージについて

2026 年 3 月初旬より仮運用開始。同年 4 月より正式稼働予定。稼働時間は原則平日の 8:00-20:00。基本的には月毎に内容を更新し、学部紹介動画や新入生向け案内、学内施設紹介、企業広告などを掲載する。

■ 学部広告掲載一覧

下記は、広報委員を通じて学部及び大学院を紹介したものである。

第 48 回全国高等学校長協会体育 部会	2024 年 11 月 21 日（木） ～11 月 22 日（金）、 熊本西高等学校/ザ・ニュー ーホテル熊本	A4 1 ページ
-------------------------	--	----------

12 外部資金獲得実績

霜島 広樹

科学研究費 (R6 年度)		(含間接経費)	
研究種目	代表者名	研究課題	金額 (円)
基盤研究 (B)	檜垣 靖樹	DNA メチル化を基盤とする運動適応機構の解明	2,860,000
基盤研究 (B)	上原 吉就	骨格筋高比重リポ蛋白 (HDL) 産生システムの筋分化促進作用およびメカニズムの解明	4,810,000
基盤研究 (B)	道下 竜馬	「時間運動学」に基づいた疾病予防や改善のために有効な運動プログラムの開発	4,420,000
基盤研究 (B)	川中 健太郎	筋量増加に有効な食事処方に関する研究 -糖質が筋タンパク質合成を促進する可能性-	5,200,000
基盤研究 (B)	富賀 裕貴	運動により高まる脳機能の長期維持機構の解明とその応用	4,030,000
基盤研究 (C)	柿山 哲治	バスケットボール移入におけるアメリカ人女性宣教師の貢献と役割	1,820,000
基盤研究 (C)	布目 寛幸	核磁気共鳴画像法 (MRI) を用いた日本人身体部分慣性特性標準データの確立	1,300,000
基盤研究 (C)	山本 泰暉	人工甘味料及び食事組成による骨格筋不全メカニズムの解明及び自発運動による効果検証	1,950,000
基盤研究 (C)	霜島 広樹	大学運動部における組織風土概念の再検討とその醸成メカニズムの解明	1,300,000
基盤研究 (C)	吉村 一朗	足部内在筋筋力が下肢機能に及ぼす影響の解明	1,300,000
挑戦的研究 (開拓)	檜垣 靖樹	身体運動とうま味で奏でる スポーツと健康の価値の創造	4,290,000
挑戦的研究 (萌芽)	富賀 裕貴	骨格筋萎縮を予防する新奇アディポエクサカインの探索と応用	4,550,000
若手研究	田中 璃己	新しい身体冷却法による褐色脂肪の活性化は、生活習慣病の予防策となるか?	2,340,000
若手研究	三浦 征	体脂肪蓄積による筋量増加機構の解明: アディポカイン分泌動態の変化に着目して	1,690,000
研究活動スタート支援	飯竹 烈士	第3世代人工芝がサッカーの特異的動作に及ぼす動力的変化の解明	1,820,000

研究活動スタート支援	三浦 征	骨格筋 Nrf2 による脂肪性肝炎防御機構の解明： 臓器間の抗酸化因子伝達に着目して	1,430,000
------------	------	---	-----------

受託研究 (R6 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額（円）
国立研究開発法人医薬 基盤・健康・栄養研究所	檜垣 靖樹	たんぱく質必要量の評価のための基礎データ構築研究	8,775,000
中村学園大学	道下 竜馬	メタボリック症候群の個々人の心音に基づく運動アドバイス シートの開発	15,000
国立研究開発法人医薬 基盤・健康・栄養研究所	檜垣 靖樹	サルコペニア患者における栄養療法確立のための基盤構築研究	2,600,000

共同研究 (R6 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額（円）
国立研究開発法人産業 技術総合研究所	川中 健太郎	末梢血流の促進は糖尿病－サルコペニアの併存疾患治療に寄与する か？	0
バンドー化学㈱	吉村 一朗	AT メジャーを用いた足関節外側靱帯損傷患者における術前後/後 療法の経過管理によって早期スポーツ復帰を促せる管理指標の研究	1,000,000

研究助成寄附金 (R6 年度)

機関名	研究代表者	研究課題	金額（円）
Raydel Korea Co., Ltd. Byong Ku Lee	上原 吉就	研究助成のため	5,400,000
九州体育・スポーツ学 会	川崎 百合香	研究助成のため	150,000

13 リスクマネジメント委員会

乾 眞寛・小四郎丸 聖

学部内に「リスクマネジメント委員会」が設置されてきた経緯は、2012年12月の女子指定寮「あしかり荘」の火災事故により、本学部生1名が死亡する痛ましい出来事がきっかけであったと記憶している。私自身は当時学生部委員でもあり、被害者学生やご家族、関係する運動部学生の聞き取り調査や心のケア、賠償問題、再発防止策、報告書作成など長期間にわたり非常にデリケートな問題に対処した。その際、学部内に事件・事故・災害等に対して緊急を要する判断や迅速な初期対応する委員会が必要であるという認識から2013年度から学部内に「リスクマネジメント委員会」が設置された。

その後は、2016年の熊本地震の際の安否確認や被災学生の調査などを行ってきた。

2020年度は、年度当初から新型コロナウイルスへの学部対応が求められ、過去に経験したことのない状況下で、学部の教職員、学生、そのご家族の安全・安心、生命を守るために学部長、日高事務室長と共にコロナ対策の最前線で情報収集と感染対策管理、陽性者情報の確認と対応策の検討、学生課・保健所との連絡など、スピード感を持って具体的な判断を行い関係各部署に連絡を取り、連携して問題解決を実行していくことが求められた。

2022年度(令和4年)は、コロナ対策も徐々に緩和され、対面授業や定期試験もコロナ禍以前の状態に戻っていく「With コロナ時代」への移行期とも呼べる一年であった。

2023年度(令和5年)は、コロナ対応による行動制限がほぼ解除され、学部の行事、授業、集中実習等も平常通りに開催された一年だった。しかしながら、全国各地の大学において、特に運動部学生の大麻所持事件が多発し、本学においても例外ではなく2人の現役学部生が年度内に逮捕される事案が発生したことは、衝撃的な出来事だった。

逮捕者Aは、既に運動部を退部し、部活動には参加していない学生であったが警察への捜査協力として、彼が所属していた運動部全員やゼミ生、1、2年次の同クラス全員に及ぶ聞き取り調査を実施した。

また、逮捕者Bは、運動部には所属していなかったが、念のため学生A、Bと接点があったと思われるクラス(1、2年次)全員への聞き取りも実施した。

幸いにも、この2人以外への広がり確認できなかったが、大麻に関する誘惑や広がりSNS等を通じて極めて身近な問題であることを痛感した。

2024年は、大麻不法取得等の事案は幸いにも発生しなかった。学部全体あるいは、部活動単位での集団による継続事件の発生も無いことから、組織的なリスクマネジメントが成果を収めていると言える。

ただし、2024年11月に帰省中の宮崎市内での密漁により、2年次生Aが1名逮捕された。11月27日にリスクマネジメント委員会を開催し、対応を競技した。数日後、釈放され自宅で謹慎していたが、両親との協議により退学することとなり退学届を提出したため、この案件はこれで終結した。

No	日付	開始時刻	議題
1	令和5年7月4日	17時30分～	授業・学内スポーツ現場での事故発生対応について
2	令和5年11月28日	12時40分～	逮捕学生および学部内の対応について
3	令和5年11月29日	メール会議	緊急調査の実施について（対応報告）
4	令和5年12月19日	メール会議	緊急調査の実施について（完了報告）
5	令和6年2月14日	メール会議	逮捕学生への指導について（対応報告）
6	令和6年2月26日	メール会議	逮捕学生への指導について（対応報告）
7	令和6年3月8日	メール会議	逮捕学生への指導について（対応報告）
8	令和6年11月27日	10時30分～	逮捕学生および学部内の対応について

14 関連資料一覧

--

※ 福岡大学 大学案内

※ 福岡大学スポーツ科学部 学部ガイド

※ 福岡大学入試ガイド

※ 福岡大学要覧

※ 福岡大学スポーツ科学研究

※ 教育開発支援機構年報

※ 福岡大学研究推進部年報

※ 福岡大学スポーツ科学部卒業論文抄録集（令和6年度）

※ 教育実習報告書

※ 教職事前実習報告書

※ 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム事業報告

※ スキー実習・アクア実習・ゴルフ実習・キャンプ実習・スケート実習報告書

※ ASASPO 倶楽部成果報告書

※ 大学生のスポーツと健康生活（大修館書店）